

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第150集

お こ ばる
尾 小 原 遺 跡 (第三次調査)
Okobaru Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 45

2007

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区遺跡遠景（西より）



調査区遺跡遠景（北東より）



散礫分布状況全景



散礫分布状況近景



集石遺構分布状況近景

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載された尾小原遺跡（第三次調査）では、縄文時代早期から晩期の遺構・遺物が確認されました。特筆すべきは縄文時代早期の成果です。検出された遺構は多く、集石遺構が65基、炉穴が7基であります。同時代の一つ瀬川下流域ではこれだけの遺構が検出された例はなく、該期の拠点的な集落跡であったといえるでしょう。また、遺物についても押型文土器をはじめ多様な土器が出土しています。押型文土器については古いものから新しいものまで幅広く存在し、押型文土器の導入から衰退までの過程を考える上で重要な資料となるでしょう。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・ご助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

例 言

1. 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した児湯郡新富町所在の尾小原遺跡（第三次調査）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成 17 年 10 月 1 日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本高速道路公団として記載する。
3. 現地での実測等の記録は島木良浩・岡田 諭・佐竹智光・児玉 幹のほか、高山富雄・杉田康之・山田洋一郎・小山 博・嶋田史子・柳田裕三・土谷崇夫・河野雅人が行い、発掘作業員が補助した。
4. 整理作業は埋蔵文化財センターで行った。実測図の作成及び浄書については、土器は岡田が行い、石器は本センターの藤木 聡が行ったほか、整理作業員が補助した。また、一部の石器は実測図作成と浄書を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
5. 現地での写真撮影は島木・岡田が行った。また遺物の写真撮影は岡田が行った。
6. 今次調査のグリッド杭設置及び一部の地形測量業務は（株）外山測量設計コンサルタントに委託した。空中写真は（株）九州航空に委託した。自然科学分析は（株）古環境研究所に委託した。なお、第 V 章第 1 節及び第 2 節は（株）古環境研究所からの成果報告であるが、レイアウトを一部変更して掲載した。
7. 本書に使用した略記号は次の通りである。
KAh … 鬼界—アカホヤ火山灰 Kr-Kb … 霧島—小林軽石 AT … 始良 Tn 火山灰
Kr-Aw … 霧島—アワオコシ Kr-Iw … 霧島—イワオコシ Gr. … グリッドライン SI … 集石遺構
SP … 炉穴 SC … 土坑 SR … 碎片集中箇所 W.W. II … 第二次世界大戦
8. 本書に使用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の 1/2,500 地形図をもとに作成した。また遺跡周辺地形図等は日本道路公団宮崎工事事務所から提供の 1/1,000 測量図をもとに作成した。
9. 本書で用いた標高は海拔高であり、方位は座標北（GN）を基本とし、遺構実測図等の一部に磁北を（MN）を用いた。
10. 国土座標は、国土座標第 II 系を基に設定している。
11. 土層及び土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に準拠した。
12. 本書の執筆・編集は岡田が担当した。
13. 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに 1
 第1節 調査に至る経緯 1
 第2節 調査の組織 1
 第II章 遺跡の環境 2
 第1節 地理的環境 2
 第2節 歴史的環境 2
 第III章 調査の経過と方針 4
 第1節 試掘及び確認調査 4
 第2節 基本層序 5
 第3節 発掘調査の方法と経過 5
 1 調査方法と方針 5
 2 調査日誌抄 7
 第4節 整理作業及び報告書作成 7
 第IV章 発掘調査の成果 8
 第1節 旧石器時代の遺物 8
 第2節 縄文時代早期の遺構と遺物 9
 1 散礫 9
 2 集石遺構 12
 3 炉穴 48
 4 土坑 53
 5 碎片集中箇所 55
 6 土器 57
 7 石器 64
 第3節 縄文時代晩期の遺構と遺物 69
 1 集石遺構 69
 2 土器 69
 3 石器 70
 第4節 古墳時代以降の遺物 73
 第V章 自然科学分析の結果 74
 第1節 放射性炭素年代測定 74
 1 試料と方法 74
 2 測定結果 74
 3 所見 75
 第2節 樹種同定 75
 1 はじめに 75
 2 試料 75
 3 方法 75
 4 結果 75
 第VI章 総括 77
 第1節 尾小原遺跡発掘調査成果の概要 77
 1 第一次調査成果の概要 77
 2 第二次調査成果の概要 77
 3 第三次調査成果の概要 77
 第2節 尾小原遺跡発掘調査の総括 78
 第3節 集石遺構に関する検討 79

挿図目次

図1 調査区と周辺地形 (S=1/4,000) 2
 図2 周辺遺跡分布 (S=1/50,000) 3
 図3 確認調査トレンチ位置 (S=1/1,000) 4
 図4 グリッド配置 5
 図5 区割り概念図 5
 図6 旧石器時代トレンチ位置 8
 図7 旧石器時代遺物 8
 図8 散礫分布範囲 10
 図9 散礫重量分布グラフ 10
 図10 縄文時代早期遺構分布 (S=1/400) 13
 図11 縄文時代早期集石遺構1 16
 図12 縄文時代早期集石遺構2 17
 図13 縄文時代早期集石遺構3 18
 図14 縄文時代早期集石遺構4 19
 図15 縄文時代早期集石遺構5 20
 図16 縄文時代早期集石遺構6 21
 図17 縄文時代早期集石遺構7 22
 図18 縄文時代早期集石遺構8 23
 図19 縄文時代早期集石遺構9 24
 図20 縄文時代早期集石遺構10 25
 図21 縄文時代早期集石遺構11 26
 図22 縄文時代早期集石遺構12 27
 図23 縄文時代早期集石遺構13 28
 図24 縄文時代早期集石遺構14 29
 図25 縄文時代早期集石遺構15 30
 図26 縄文時代早期集石遺構16 31
 図27 縄文時代早期集石遺構17 32
 図28 縄文時代早期集石遺構18 33
 図29 縄文時代早期集石遺構19 34
 図30 縄文時代早期集石遺構20 35
 図31 縄文時代早期集石遺構21 36
 図32 縄文時代早期集石遺構22 38
 図33 縄文時代早期集石遺構23 39
 図34 縄文時代早期集石遺構24 40
 図35 縄文時代早期集石遺構25 41
 図36 縄文時代早期集石遺構26 42
 図37 縄文時代早期集石遺構27 43
 図38 縄文時代早期集石遺構28 44
 図39 縄文時代早期集石遺構29 45
 図40 縄文時代早期集石遺構30 46
 図41 縄文時代早期集石遺構31 47
 図42 縄文時代早期炉穴1 48
 図43 縄文時代早期炉穴2 49
 図44 縄文時代早期炉穴3 50
 図45 縄文時代早期炉穴4 52
 図46 縄文時代早期土坑1 53
 図47 縄文時代早期土坑2 54

図 48	碎片集中箇所位置	55
図 49	碎片分布	55
図 50	縄文時代早期土器 1	57
図 51	縄文時代早期土器 2	58
図 52	縄文時代早期土器 3	59
図 53	縄文時代早期土器 4	60
図 54	縄文時代早期土器 5	61
図 55	縄文時代早期石器 1	65
図 56	縄文時代早期石器 2	66
図 57	縄文時代早期石器 3	67
図 58	縄文時代早期石器 4	68
図 59	SI66	69
図 60	Ⅲ b 層上面等高線図	69
図 61	縄文時代晩期土器 1	71
図 62	縄文時代晩期土器 2	72
図 63	縄文時代晩期石器 1	72
図 64	縄文時代晩期石器 2	73
図 65	古墳時代中期土器	73
図 66	12.7mm 重機関銃弾莖	73
図 67	散礫重量分布、土器分布、石器分布	80

挿表目次

表 1	トレンチの規模と面積	4
表 2	基本層序	5
表 3	旧石器時代遺物一覧	8
表 4	散礫計量結果	11
表 5	集石遺構一覧	14
表 6	集石遺構計量結果	15
表 7	碎片一覧	56
表 8	縄文時代早期土器一覧	62
表 9	縄文時代早期石器一覧	64
表 10	縄文時代晩期土器一覧	70
表 11	縄文時代晩期石器一覧	70
表 12	尾小原遺跡第三次調査における 樹種同定結果	76

挿入写真目次

写真 1	確認調査風景	6
写真 2	トレンチ調査	6
写真 3	集石遺構調査	6
写真 4	炉穴調査	6
写真 5	礫仮置き状況	9
写真 6	礫一次洗浄	9
写真 7	礫二次洗浄	9
写真 8	C4d 区散礫	9
写真 9	礫計量	9
写真 10	12.7mm 重機関銃弾莖	73
写真 11	尾小原遺跡第三次調査の炭化材	76
写真 12	尾小原遺跡から望む高千穂峰	80

巻頭図版目次

巻頭図版 1	調査区遠景 (西より)
巻頭図版 2	調査区遠景 (北東より)
巻頭図版 3	散礫分布状況全景
巻頭図版 4	散礫分布状況近景 集石遺構分布状況近景

巻頭図版目次

図版 1	82
C4 区 集石遺構分布 1	C4 区 集石遺構分布 2
図版 2	83
Gr.5 付近以北集石遺構分布	Gr.5 付近以南集石遺構分布
図版 3	84
SI44・45・46 検出前	SI44・45・46 検出状況
SI 1 配石検出状況	SI 4 配石検出状況
SI10 配石検出状況	SI15 配石検出状況
SI16 配石検出状況	SI22 配石検出状況
図版 4	85
SI24 配石検出状況	SI30 配石検出状況
SI32 配石検出状況	SI37 配石検出状況
SI39 配石検出状況	SI43 配石検出状況
SI44 炭化材出土状況	SI44 配石検出状況
図版 5	86
SI51 配石検出状況	SI60 配石検出状況
SI31 配石検出状況	SP 1・2 完掘状況
SP 4・7 検出状況	SP 6 半掘状況
SI66 検出状況	Ⅲ b 層上面調査区全景 (西から)
図版 6	87
押型文土器 (山形)	押型文土器 (細粒楕円)
押型文土器 (粗大楕円)	
擦糸文土器・その他の押型文土器	
貝殻条痕文土器 1	貝殻条痕文土器 2
縄文時代晩期土器 1	縄文時代晩期土器 2
古墳時代中期土器	
図版 7	88
縄文時代早期石鏃	
縄文時代早期剥片・スクレイパー	
縄文時代早期石斧	
縄文時代早期石核・二次加工剥片	
縄文時代早期磨石	
縄文時代早期敲石・赤色顔料? 付着石器	
縄文時代晩期石錘・砥石	
縄文時代晩期石鏃	旧石器時代石器

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となっている。さらに、平成9年12月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に、発掘調査を実施することとなった。調査は、平成11年度から県教育委員会が日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。なお、新富町内の発掘調査は平成12年度から開始され、平成17年6月を以って完了した。

尾小原遺跡は総面積 25,600㎡であり、本調査は三次にわたって行われた。第一次調査は平成13年11月1日～平成14年8月30日にかけて実施され、4,752㎡を調査した。第二次調査は平成15年9月4日～平成16年1月29日にかけて実施され、5,000㎡を調査した。

今回報告する第三次調査範囲は、当初、調査対象ではなかった。しかし、第二次調査時に踏査と試掘を行った結果、斜面中に平坦な地形があり、被熱によると考えられる赤化礫やチャートの剥片が得られたため、遺構・遺物の広がり予想された。この結果を受け、該当する範囲を調査対象面積に追加し、確認調査を行った。期間は平成16年9月8日～10月8日まで、調査面積は400㎡である。詳細は後述するが、縄文時代早期～古墳時代中期の遺構・遺物を確認したため、確認調査地の周辺2,000㎡に対して本調査を行う必要があると判断した（図1）。第三次調査は平成16年12月1日～平成17年5月13日にかけて実施し、整理作業は平成17年6月1日～平成18年5月31日まで行った。

第 2 節 調査の組織

尾小原遺跡第三次調査の調査組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	宮園淳一（平成 16・17 年度） 清野 勉（平成 18 年度）
副所長兼総務課長	大藪和博（平成 16 年度）
副所長	加藤悟郎（平成 18 年度）
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫（平成 16～18 年度）
総務課長	宮越 尊（平成 17・18 年度）
調査第一課長	高山富雄（平成 16～18 年度）
主幹兼総務係長	石川恵史（平成 16・17 年度）
主幹兼総務担当リーダー	高山正信（平成 18 年度）
調査第一係長	谷口武範（平成 16 年度）
主幹兼調査第一係長	長津宗重（平成 17 年度）
主幹兼調査第一担当リーダー	長津宗重（平成 18 年度）
主幹兼調査第二係長	長津宗重（平成 16 年度）
主幹兼調査第二係長	菅付和樹（平成 17 年度）
主幹兼調査第二担当リーダー	菅付和樹（平成 18 年度）
主査（調査・調整担当）	島木良浩（平成 16・17 年度）
主事（調査・報告書担当）	岡田 諭（平成 16～18 年度）
主事（調査担当）	佐竹智光（平成 17 年度）
調 査 員	児玉 幹（平成 17 年度）

調査指導（敬称略）

泉 拓良（京都大学）

小畑弘己（熊本大学）

田崎博之（愛媛大学）

広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）

本田道輝（鹿児島大学）

柳沢一男（宮崎大学）

調査協力 一ツ瀬川土地改良区

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

尾小原遺跡は児湯郡新富町大字新田 16065-2、16066-1（字尾小原）に所在する。本遺跡の所在する新富町は、宮崎平野のやや中央よりの沿岸部にあって、北部に茶臼原段丘面（海拔約 120m）、三財原段丘面（海拔約 90m）、新田原段丘面（海拔約 70m）や丘陵を、南部に九州山地に水源をもつ一ツ瀬川の低地が広がる。また、鬼付女川や日置川などの小河川が細長い浸食谷を台地に刻み、東部の海岸地帯に砂丘や湖沼を伴う低地も形成されている。

本遺跡は新田原段丘面に立地する。この段丘面には多くの開析谷が深く入り、段丘の縁辺には開析谷により形成された尾根が多数存在する。今次調査区はこのような尾根の一つに位置し、新田原台地より南西に張り出す尾根からさらに派生する小尾根に立地する。この小尾根の中央付近には平坦面があり、小尾根の西側と南側は開析谷が発達している。谷を挟んで西には向原第1遺跡が位置する。

第2節 歴史的環境

尾小原遺跡（第三次調査）では旧石器時代～古墳時代の遺構・遺物が確認された。調査成果の意義と背景を考えるために、旧石器～縄文時代の歴史的環境を概観する（図2）。

1 旧石器時代

東九州自動車道関連発掘調査以前、新富町内における旧石器時代の資料数は乏しいものであったが、大野寅夫氏の「畦原型細石核」の表採が特筆される。この細石刃核は南九州に分布する細石刃核であり、標識資料として有名である。発掘調査により確認された例では、溜水遺跡では礫群、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃、細石刃核などが検出された。また、銀代ヶ迫遺跡ではナイフ形石器やラウンドスクレイパー等が出土した。

近年では、東九州自動車道関連発掘調査によって、新富町内においても旧石器時代の資料が増加した。

特に AT 下位の資料が得られたことが大きな成果であり、具体的には、音明寺第1・2、東畦原第2・3、

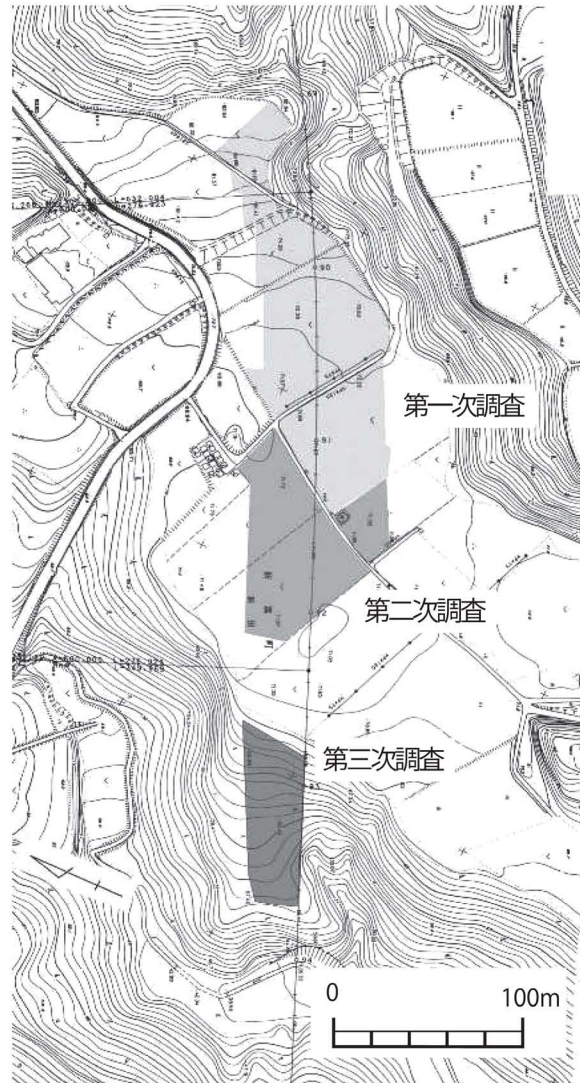
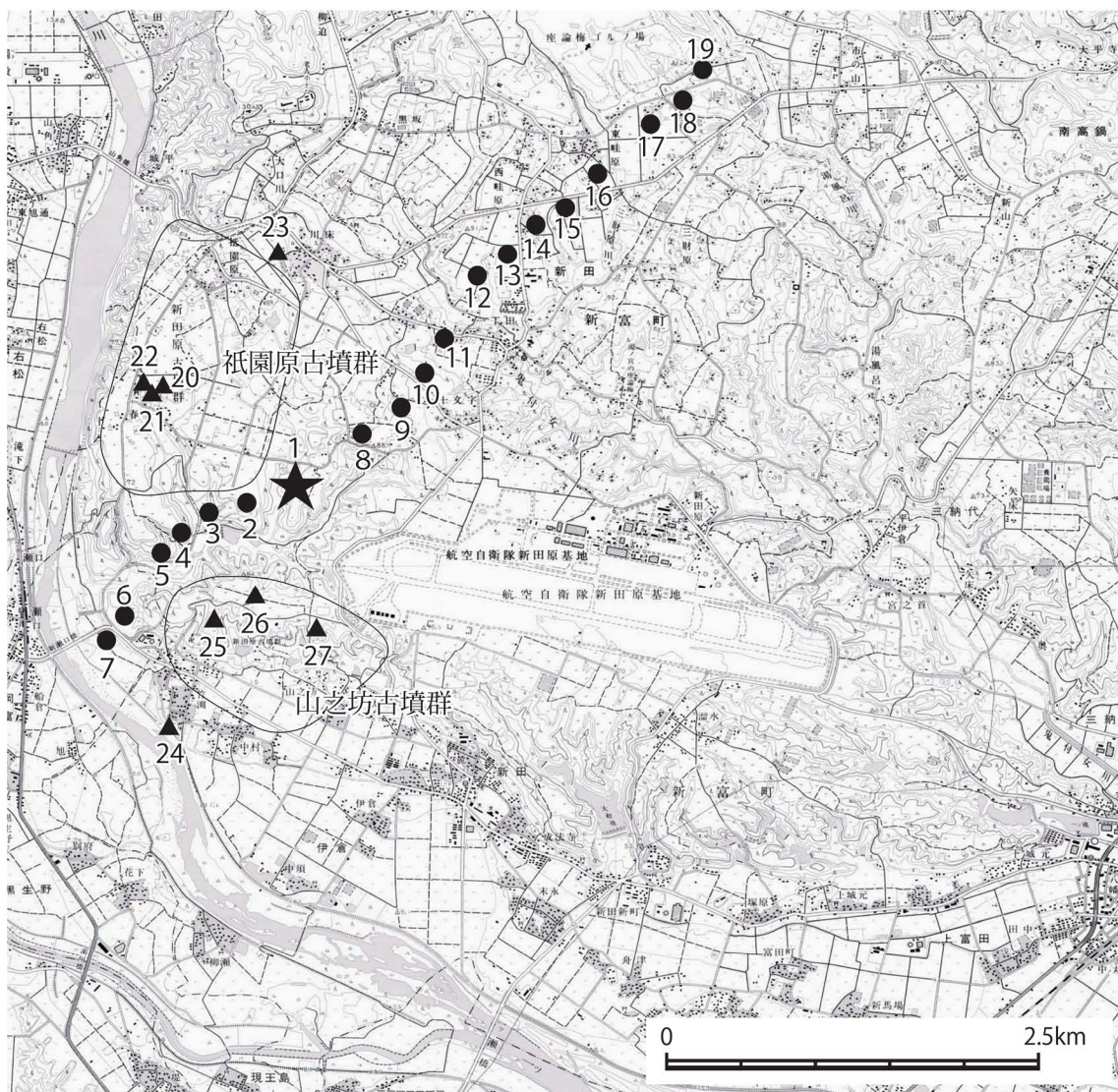


図1 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

西畦原第1・2、上新開、尾小原遺跡（第一次調査）で礫群や礫塊石器等を中心とした遺物が出土した。また、石器群は AT 下位の MB2 下部から MB3 では礫塊石器やナイフ形石器・剥片・石核等が多く、AT 直下～Kr-Kb では、剥片石器の量が増加し、石器ブロック等も多く報告されている。

2 縄文時代

新富町内における早期の代表的な遺跡としては、瀬戸口遺跡が挙げられる。この遺跡では集石遺構 23 基が検出され、押型文土器・貝殻条痕文土器及び石鏃や石斧、磨石等の石器が出土した。この他に藤掛遺跡や銀代ヶ迫遺跡、七又木遺跡などでも該期の遺構や遺物が確認されている。



【東九州自動車道関連遺跡】

1. 尾小原遺跡 2. 向原第1遺跡 3. 向原第2遺跡 4. 藤山第1遺跡 5. 藤山第2遺跡 6. 宮ノ東遺跡 7. 宮ノ前遺跡
 8. 永牟田第2遺跡 9. 永牟田第1遺跡 10. 勘大寺遺跡 11. 一丁田遺跡 12. 上新開遺跡 13. 西畦原第2遺跡
 14. 西畦原第1遺跡 15. 東畦原第3遺跡 16. 東畦原第2遺跡 17. 東畦原第1遺跡 18. 音明寺第2遺跡 19. 音明寺第1遺跡

【新富町内遺跡】

20. 瀬戸口遺跡 21. 春日神社横牧遺跡 22. 春日地区遺跡第2地点 23. 川床遺跡 24. 竹淵C遺跡 25. 銀代ヶ迫遺跡
 26. 八幡上遺跡 27. 七又木遺跡

図2 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

東九州自動車道関連埋蔵文化財発掘調査においても早期の遺構・遺物が確認されており、音明寺第1・2、東畦原第2、西畦原第1・2、上新開、勘大寺、永牟田第2、尾小原（第一次、第二次）、向原第1、藤山第1の各遺跡で集石遺構や炉穴が検出され、押型文土器・貝殻条痕文土器、及び石鏃や石斧などの石器類が出土した。

尾小原遺跡に近接する遺跡としては、開析谷を挟んで位置する向原第1遺跡がある。ここでは貝殻条

痕文を主体とする土器群と集石遺構が確認されており、押型文土器主体の尾小原遺跡との関係が注目される。また、藤山第1遺跡では丘陵頂部で貝殻条痕文土器、丘陵尾根部及び低所で押型文土器が出土した。それぞれ集石遺構が伴っており、時期によって集石遺構の立地が変化するという特徴がみられた。

晩期の遺構は少ないが、春日遺跡（5次）、尾小原遺跡（第二次）、向原第1遺跡などで該期の孔列文土器・組織痕土器・黒川式土器などが出土している。

第Ⅲ章 調査の経過と方針

第1節 試掘及び確認調査

第二次調査時に行われた踏査と試掘結果を受けて、より具体的な遺構・遺物の残存状況とその範囲、土層堆積状況、及び旧地形の把握を目的として確認調査を行った。

調査対象地は東北から西南方向へ傾斜する尾根の南半部である。中央付近に平坦面があり、若干南へ延びる。調査対象地の東南部分（高速道路センターラインより東南側）は傾斜が急であることや、林業用道路による削平が認められたため調査対象から除外した。従って、最終的に残った2,400㎡を調査対象とし、トレンチを設定した(図3・表1)。1・3・5・6・7Tは等高線に対して直交するように設定し、土層堆積状況の確認を主目的とした。2・4Tは平坦面に設定し、遺構検出と遺構分布の範囲確認を目的とした。

調査手順は、K-Ah二次堆積層以上が遺物包含層であるかの確認、K-Ah上面で遺構検出、部分的にML1まで掘削して縄文時代早期の遺構検出、の3段階で行った。また、平成15年度試掘トレンチT1とT2を今回調査で再度精査し、トレンチ位置図に加えた。

調査の結果、表土～K-Ah二次堆積層までは縄文時代晩期～古墳時代中期の遺物包含層であった。K-Ah層上面での遺構検出の結果、4Tで土坑2基が検出され、縄文時代晩期の孔列文土器が出土した。他のトレンチでも、部分的にML1まで掘削したところ、5T西側～2Tにかけての範囲で散礫を、4Tで集石遺構1基、楕円押型文土器が出土した土坑1基が検出された。

以上の結果から、縄文時代早期と晩期の遺構・遺物の残存が確認できた。晩期の遺構は平坦面に限られ、密度は低い。早期は散礫が平坦面を中心に広範囲に分布すること、集石遺構が多数存在すること、出土した土器から時期は早期中葉であることなどが想定された。5・7Tでは遺構・遺物ともに確認されなかったが、該期の炉穴は斜面に構築する例があり、5・7T周辺も調査する必要が感じられた。

表1 トレンチの規模と面積

確認調査			第二次調査時試掘		
トレンチ	規模(m)	面積(㎡)	トレンチ	規模(m)	面積(㎡)
1T	30×170	510	T1	15×50	75
2T	60×120	720	T2	15×50	75
3T	15×90	135	合計		150
4T	60×180	1080			
5T	15×400	600			
6T	15×115	165			
7T	30×265	795			
合計		4005			

≒4000

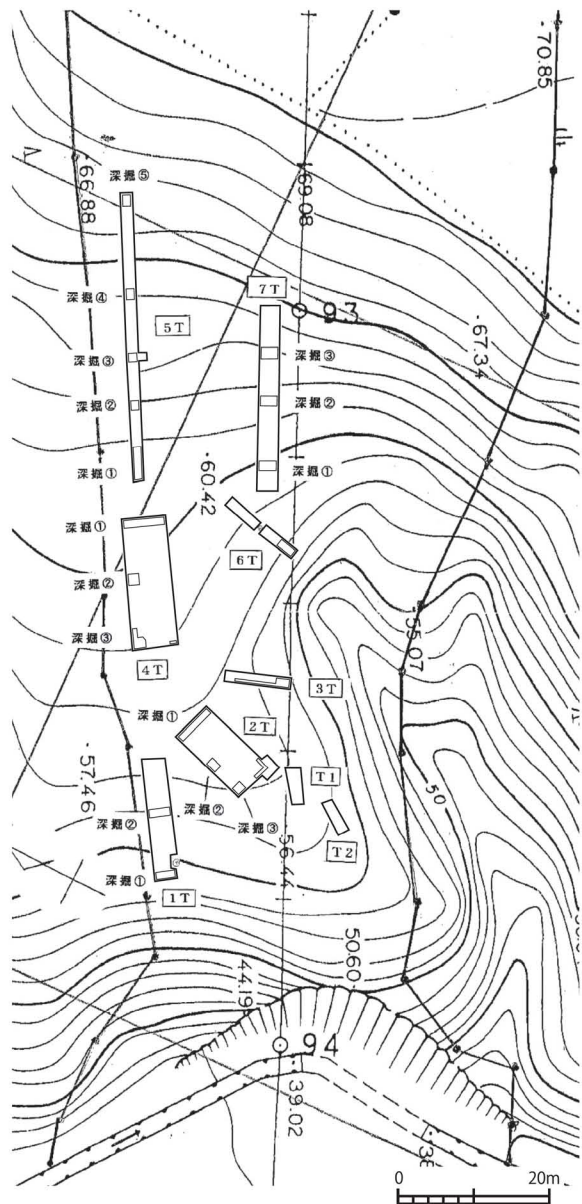


図3 確認調査トレンチ位置(S=1/1,000)

第2節 基本層序

試掘及び確認調査の結果から今次調査区内における基本層序を定めた(表2)。なお、層名は東九州自動車道(都農～西都間)基本層序(宮崎県埋蔵文化財センター2004『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集 東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV』)に準拠している。

V a層を除くI～VI層は調査区全体で確認されており、調査区が立地している尾根の全体において安定的に堆積している。V a層は散礫であるが、他の報告書では「遺構」として扱っているものが多い。今次調査では「層」として認識した。詳細は次章で述べる。VII・VIII層は3・6Tでのみ確認された。他のトレンチでは検出されなかったため、調査区内においては部分的に堆積しているようである。調査区西端の露頭ではXI～XVI層までを確認した。また、段丘礫層が露頭している箇所もあり、段丘礫は人頭大のものから砂利までの砂岩で主に構成されていることがわかった。

第3節 発掘調査の方法と経過

1 調査方法と方針

調査は2段階に分けて行った。第1段階はIII b層上面までの調査である。I～III a層までを遺物包含層と認定し、層毎に遺物の取り上げを行った。次に、III b層上面で遺構検出を行い、検出した遺構を縮尺1/10で実測した。遺構分布及び等高線図は平板を用い、縮尺1/100で作成した。この際の基準杭は任意で設定し、後で国土座標にあてはめた。第2段階はV a層以下の調査である。まず、III b層とIV層の無遺物部分を重機で除去し、その後、委託によって国土座標に基づいたグリッド(10m×10m)を設定した。グリッド名は第一次・第二次調査から独立して付けており、南北方向のグリッドを西から順にA～I、東西方向のグリッドを北から順に1～9とした(図4)。区画名は北西のグリッド交点の杭名をあてた。区画はさらに四分分割して北西をa、北東をb、南西をc、南東をdとした(図5)。

表2 基本層序

層番号	層名	土色	粘性	硬さ	備考
I	表土	10YR2/1 黒	中	弱	
II	黒色土	10YR2/1 黒	中	中	
III a	K-Ah	5YR5/8 明褐	弱	弱	二次堆積
III b	K-Ah	10YR8/8 黄橙	中	中	一次堆積
IV	MB0	7.5YR3/2 黒褐	中	強	白色粒を密に含む
V a	散礫				
V b	ML1	10YR4/6 褐	中	中	
VI	Kr-Kb	10YR3/3 暗褐	中	強	小林軽石を密に含む
VII	AT		中	弱	二次堆積
VIII	AT		無	強	軽石状(粗粒)
IX	MB2	10YR2/2 黒褐	中	強	
X	ML3	7.5YR6/8 橙	強	弱	
X I	Kr-Aw		中	強	
X II	Kr-lw		中	強	
X III	粘土層		強	強	
X IV	礫層		無	強	新田原礫層

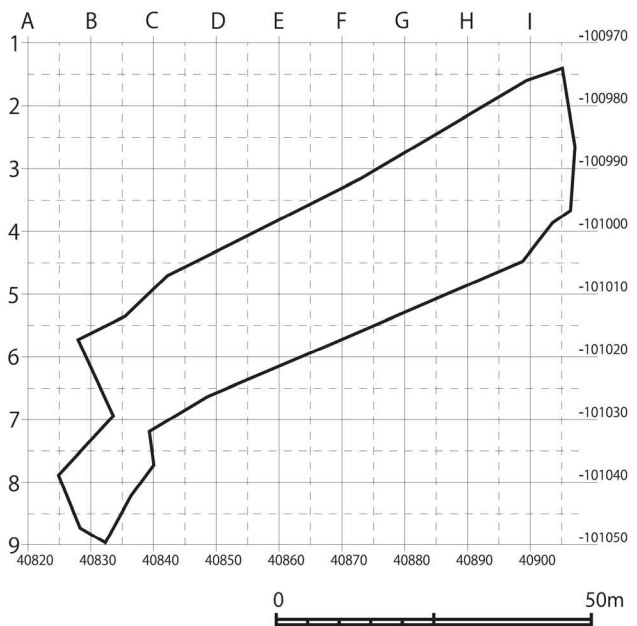


図4 グリッド配置(S=1/1,200)

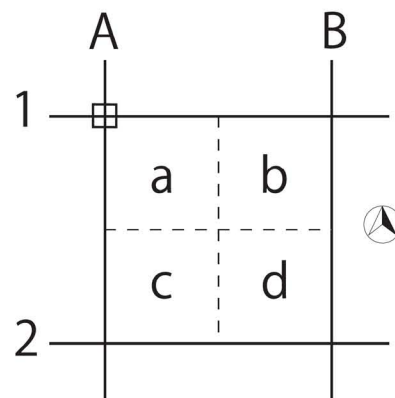


図5 区割り概念図

グリッド杭設置後、同じく委託によって地形測量を行った。次に散礫を検出し、その状況を空中写真(垂直写真)により撮影した。散礫の範囲はを記録し、細分した区画毎に礫を取り上げた。取り上げた礫は遺物の有無を確認した後、赤化礫とそれ以外のは直径10cmを基準に「大」、「小」の三つに分けてそれぞれ計量した。礫はデジタルカメラを用いて区画毎に撮影し、現地で廃棄した。

集石遺構は検出段階によって分類し、認定した。散礫検出時に認定したもの、散礫除去後に認定したもの、さらに掘り下げて検出したものの3つである。集石遺構の検出面は当時の生活面と一致しているとは限らず、検出時の礫の平面的な位置関係は記録作業の労力に比して得られる情報量が少ないと考えられる。これまでの調査では礫を一つ一つ実測している方法が一般的であったが、今回調査では検出時の礫の状況は垂直写真で撮影し、範囲のみ記録した。断面についても同様の考え方であるが、特に堆積状況を重視した。配石は人為的に配置されたものであり、原位置を保っていることが多いので、平面図と断面見通図を作成した。配石も含めて構成礫は散礫と同様の方法で計量し、その後現地で廃棄した。

集石遺構の記録終了後、遺構が分布しない箇所にトレンチを設定して炉穴の検出と旧石器時代の遺構と遺物の確認を行った。

遺構写真は主に35mmフィルムカメラを用いて、モノクロ・カラーリバーサル・カラーの3種を撮影し、デジタルカメラも補助的に利用した。また、特に重要な遺構や集石遺構の分布状況などは中判カメラを用いて撮影した。

包含層遺物については光波トランシットを用いて三次元座標を与えて一点ずつ取り上げた。また、今回調査では集石遺構の周囲に大きめの礫が点在していたが、これらの礫には明確な使用痕はないものの、集石遺構との位置関係から関連性があるものと考え、遺物として取り上げた。



写真1 確認調査風景



写真2 トレンチ調査



写真3 集石遺構調査



写真4 炉穴調査

2 調査日誌抄

【確認調査】

- 平成 16 (2004) 年
- 07.27 調査対象地現況確認。
- 09.02 竹木等刈払い業務委託開始 (～ 09.03)。
- 09.03 リース物件搬入。
- 09.08 重機投入 (～ 09.10)。
- 09.09 作業員初日。トレンチ設定 (1 ～ 5T) 及び掘削開始。堆積状況の確認。
- 09.10 表土～ K-Ah 二次堆積層にかけて、縄文時代早期～晩期の遺物、赤化礫出土。
- 09.15 二次調査時試掘トレンチ T1・T2 再調査。
- 09.17 K-Ah 下層確認開始。集石遺構検出。
- 09.21 トレンチ追加 (6・7T)。遺構・遺物なし。
- 09.27 4T の MBO で楕円押型文土器出土。
- 10.01 トレンチ断面撮影。トレンチ配置図作成。
- 10.14 埋戻し。リース物件返却。確認調査終了。

【本調査 (第三次)】

- 平成 16 (2004) 年
- 12.01 調査開始。重機掘削 (～ 12.03)。
- 12.02 リース物件搬入及び設置 (～ 12.07)。
- 12.06 作業員初日。包含層掘削及び遺構検出作業。風倒木痕と小穴 (樹痕) 多し。
- 12.14 略図作成。調査区輪郭・攪乱・遺構の記録。
- 12.20 地形測量図作成 (～ 12.22)。
- 12.21 遺構実測 (集石遺構 1 基)。
- 12.22 調査区全景写真撮影。
- 12.24 重機掘削。無遺物層除去 (～ 12.28)。
- 平成 17 (2005) 年
- 01.05 地形測量業務委託 (～ 01.07)。
- 01.11 縄文時代早期調査開始。散礫検出作業。碎片集中箇所 2 箇所確認。
- 02.06 空中写真撮影業務委託。
- 02.08 散礫範囲の記録。散礫除去及び集石遺構検出作業開始。
- 03.02 集石遺構写真撮影及び実測開始。
- 03.03 平成 15 年度試掘トレンチ再発掘。
- 03.08 職員 2 人体制。
- 03.15 GrG 以東の斜面にトレンチ 3 本設定。Kr-Kb 上面まで掘削。遺構・遺物無し。

散礫除去完了。

- 03.22 重機による排土移動 (～ 03.25)。
発掘調査と工事の調整会議。平成 17 年 5 月 13 日までの調査期間延長、調査と工事の同時進行、埋戻しについて道路公団・工事業者・当センター職員の三者で協議。
- 03.25 炉穴 1 基検出。
- 04.05 平成 17 年度継続調査開始。
- 04.14 散礫計量完了。総重量 11,815.5kg。
- 04.15 トレンチ調査 (炉穴の検出及び下層の確認)。C7 区 VI 層から旧石器時代の剥片出土。集石遺構構成礫計量開始。
- 05.10 集石遺構構成礫計量完了。総重量 6266.0kg
- 05.12 撤収作業。作業員最終日。
- 05.13 リース物件撤去。調査完全終了。

第 4 節 整理作業及び報告書作成

遺物量はコンテナ箱数にして、確認調査 1 箱、本調査 16 箱であった。遺物は現場事務所で洗浄し、注記以降の作業をセンターで行った。遺物の整理作業はセンターで行い、石器のうち剥片石器等 44 点については実測とデジタルトレースを委託した。

当センターでは、平成 18 年度から一部の報告書をデジタル方式で作成することになった。本報告書もデジタルデータを入稿した。使用 OS は Windows2000professional である。遺物・遺構平面図等のトレースについては株式会社アイシン精機の『遺構くん』を、一部 Adobe 社の Illustrator を使用し、eps 形式で保存、レイアウトを行った。編集・レイアウトについては Adobe 社の InDesign を用いた。入稿に際しては InDesign 形式での入稿を行い、印刷に際して PDFX-1a による出力を行った。

なお、巻頭及び巻末図版の写真は、印画紙にプリントしたものを版下として入稿した。

第IV章 発掘調査の成果

第1節 旧石器時代の遺物

今次調査における旧石器時代の調査は、縄文時代早期の調査が終了した場所から順次トレンチを設定した(図6)。広範囲にトレンチをあけたが、遺構の検出はなく、C6区トレンチのVI層から剥片が2点出土したのみであった(図7-2、3)。遺物の出土状況に特徴はなく、また、開析谷に向かう斜面に近いことから、原位置を保っていない可能性が高い。第VI層は全てのトレンチで確認されており、現在の尾根の斜面と同じ角度で傾斜して堆積していることから、

当時の地形は現在とほぼ同じであったと考えられる。なお、出土位置・層位は不明であるが、角錐状石器が1点(図7-1)確認されている。この石器の特徴を挙げると、基部側に礫面が残り、先端側に裏面調整がされている。素材は横長剥片であり、全体的に扁平である。以上の特徴から、旧石器時代の石器であると考えられる。

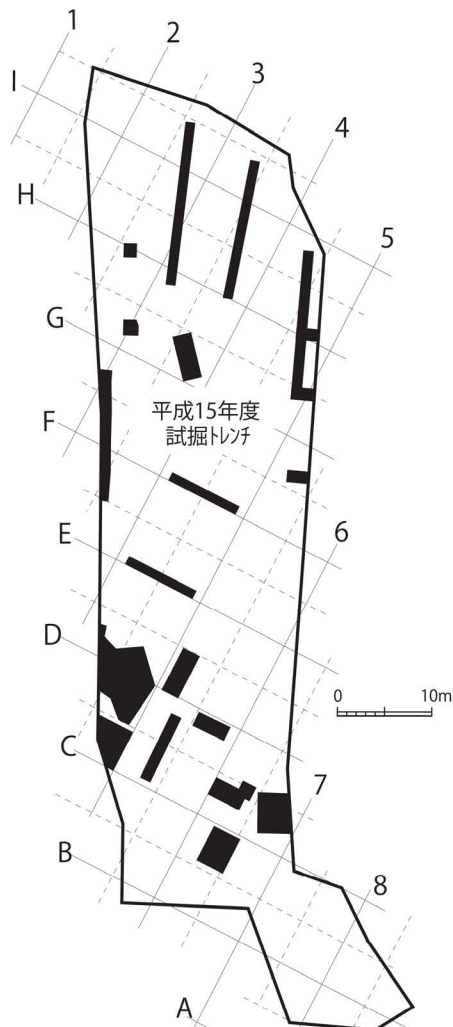


図6 旧石器調査トレンチ位置(S=1/800)

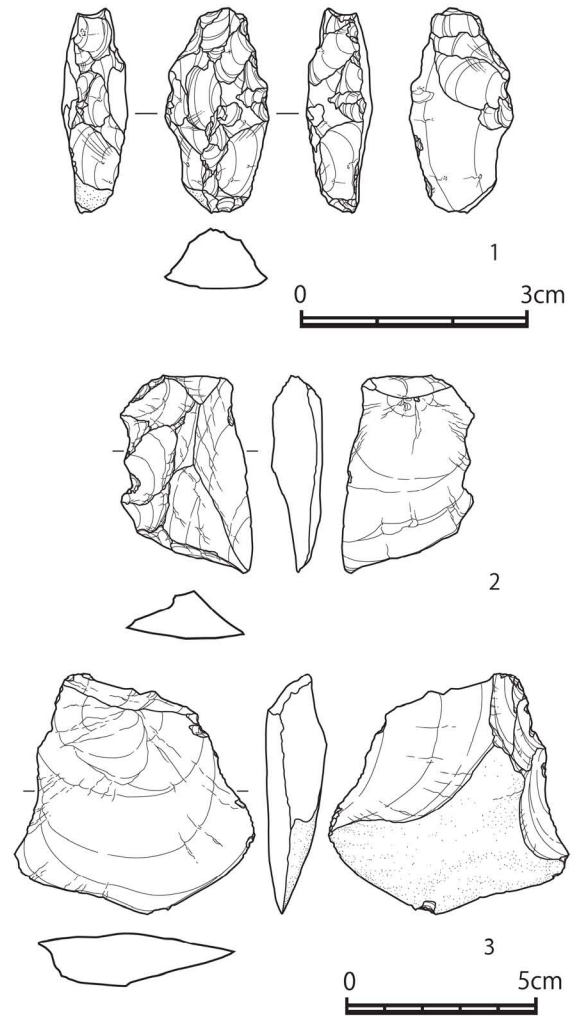


図7 旧石器時代遺物(1はS=1/1、2、3はS=1/2)

表3 旧石器時代遺物一覧

遺物 番号	出土位 置(区)	層	石 材	最大値(cm)			重量 (g)	器 種	観察所見	実測 番号	注記
				長	幅	厚					
1	不明	不明	桑ノ木津留産黒曜石	0.7	1.4	0.9	2.8	角錐状石器	稜上調整あり	41	ワバル3-3
2	C6	VI	剥片	6.4	6.4	1.7	52.8	剥片		29	ワバル3C7 HVI-1
3	C6	VI	剥片	5.2	3.5	1.4	21.4	剥片		30	ワバル3C7 HVI-2

第2節 縄文時代早期の遺構と遺物

1 散礫

【基本的な考え方】

Ⅲb層（K-Ah 一次堆積）とⅣ層（MBO）無遺物部分の除去後に、いわゆる「散礫」が検出された。散礫は解釈や記録方法が多様であり、問題点もある。唐木戸第4遺跡の成果（宮崎県埋蔵文化財センター2005『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第126集 唐木戸第4遺跡』）では、調査担当者からこれまでの調査例をふまえた現時点での見解が提示された。今次調査ではこの見解に則り、散礫を遺構ではなく「層」と認識して調査した。なお、散礫中から出土した遺物は包含層遺物として認定した。

【取上、洗浄、計量、廃棄】

記録方法については、第Ⅲ章第3節で若干ふれたが、ここでは取上げ以後の工程について詳述する。なお、集石遺構も同様の工程で処理を行った。

取り上げた礫は、調査区外の空き地で取上区画に対応する区画を設定し、仮置きをした（写真5）。礫には土が強く附着していたため、まず、コンプレッサーを用いて一次洗浄を行い（写真6）、その後、作業員が束子を用いて洗浄した（二次洗浄 写真7）。この際、礫の分類基準を作業員に教え、調査員指導の下、「赤化礫」、赤化礫以外の「大」・「小」の3つに分類した。分類毎に礫を集め、調査員が遺物の有無を確認し、遺物があれば取上げ区画毎に回収した。次に礫を集積した状態で箱尺を置き、デジタルカメラで撮影した（写真8）。撮影後、体重計と遺物用コンテナを写真9のように設置して計量を行った。計量の際は、作業員の安全面を考慮し、一度に量る重さを25kg以下に抑えた。最終的に、工事の妨げにならないよう、礫を広げて遺跡内に廃棄した。

今回のような方法をとることができたのは、調査環境に大きく起因する。すなわち、水を大量に利用して効率よく礫を洗浄することが可能であったこと、調査区外に広い作業場所が確保できたこと、が挙げられる。今回は調査方法の具体例の一つとして提示したい。



写真5 礫仮置き状況



写真6 礫一次洗浄



写真7 礫二次洗浄



写真8 C4d区散礫



写真9 礫計量

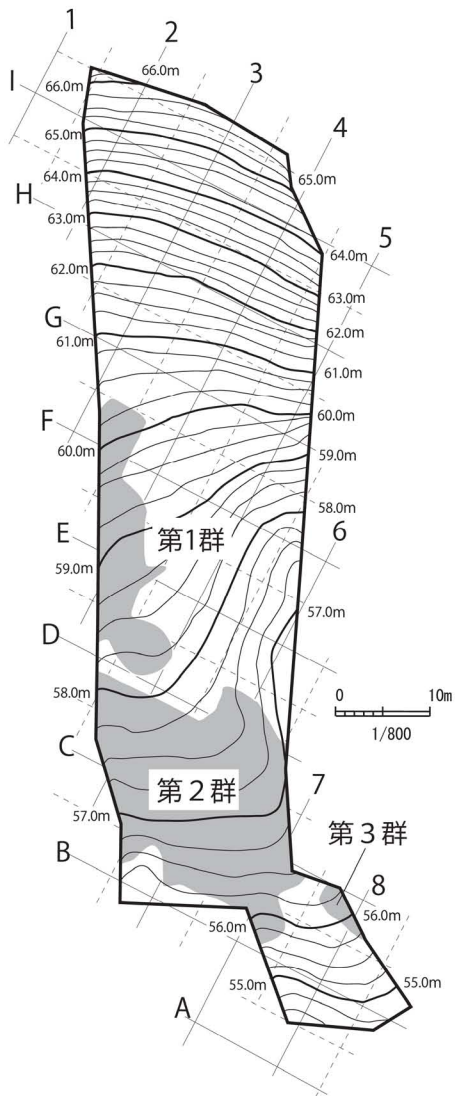


図8 散礫分布範囲 (S=1/800)

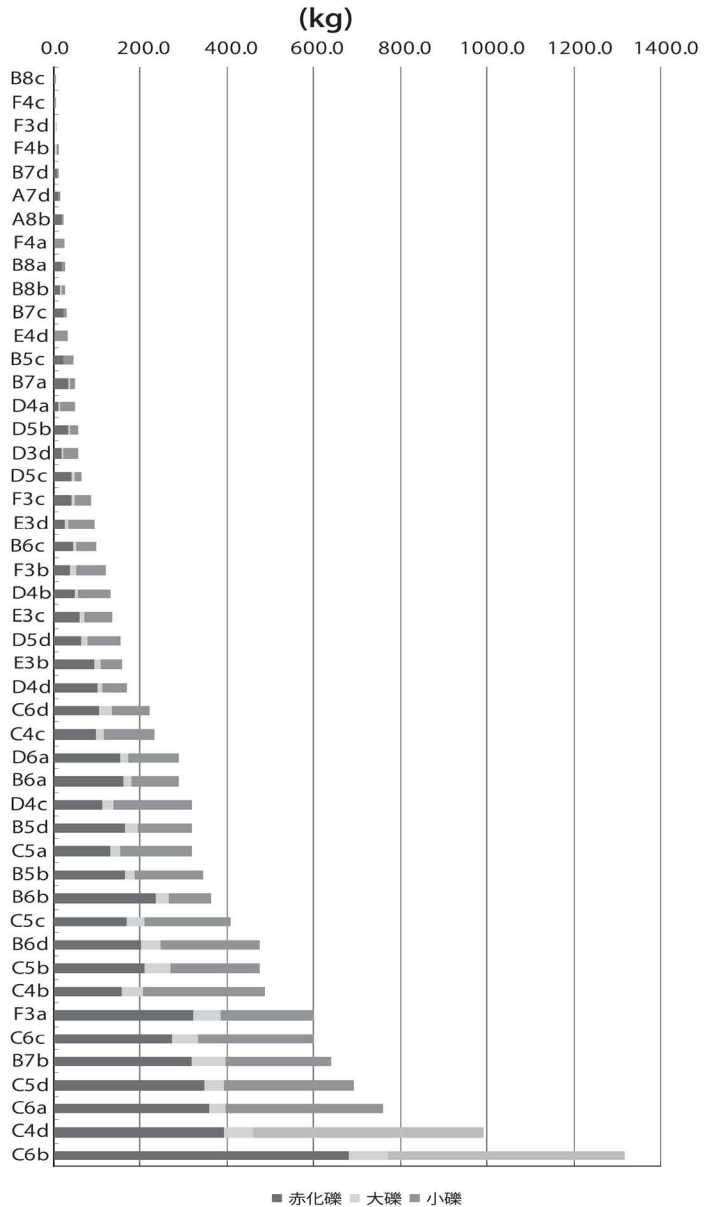


図9 散礫重量分布グラフ

【計量結果】

散礫の分布範囲を示したのが図8中のトーン部分である。「層」としてある程度の厚さが認められた範囲を散礫の範囲として認定した。ただし、散礫の範囲外にも礫が疎らに分布しており、これらは区画毎に取上げて計量した(表4)。

第1群は尾根の中央部分に分布する。東側の斜面の傾斜が緩くなり、平坦面にさしかかるあたりから礫の分布が始まる。東側斜面では礫は1点もなく、第1群の礫は斜面の高所から流れ落ちたものとは考

え難い。第1群中最大重量はF3a区である。

第2群は尾根平坦部から西側斜面に向かって分布する。礫重量はC4d区とC6b区が群を抜いており、第2群の中心と言える。第2群の礫重量はこの2区画から西側斜面に向かって徐々に減少する。

なお、D5a区は礫分布の空白域である。この区画では直径約2mの抜根による攪乱があり、分布していた礫はその影響を強く受けていると考えられるため、礫を取上げなかった。

表4 散礫計量結果

地区	散 礫 (kg)				土 石 器 器	備 考
	総量	小 礫	大 礫	赤 礫		
C6b	1319.0	547.0 (41 %)	89.0 (7 %)	683.0 (52 %)	○	尾鈴山酸性岩類少量
C4d	991.0	529.0 (53 %)	69.0 (7 %)	393.0 (40 %)	○	
C6a	760.0	364.0 (48 %)	35.0 (5 %)	361.0 (48 %)		尾鈴山酸性岩類(小礫・赤礫)少量
C5d	693.5	300.0 (43 %)	46.0 (7 %)	347.5 (50 %)		
B7b	639.5	244.0 (38 %)	77.0 (12 %)	318.5 (50 %)		
C6c	600.0	265.5 (44 %)	63.0 (11 %)	271.5 (45 %)	○	
F3a	598.0	212.0 (35 %)	65.0 (11 %)	321.0 (54 %)	○	
C4b	486.0	280.0 (58 %)	48.0 (10 %)	158.0 (33 %)		
C5b	476.0	205.5 (43 %)	60.5 (13 %)	210.0 (44 %)		
B6d	474.5	226.0 (48 %)	45.5 (10 %)	203.0 (43 %)	○	
C5c	407.5	197.0 (48 %)	43.5 (11 %)	167.0 (41 %)		
B6b	361.5	95.5 (26 %)	30.0 (8 %)	236.0 (65 %)		
B5b	346.0	157.5 (46 %)	23.5 (7 %)	165.0 (48 %)		
C5a	319.5	167.0 (52 %)	22.5 (7 %)	130.0 (41 %)		
B5d	316.5	121.0 (38 %)	32.0 (10 %)	163.5 (5 %)		
D4c	316.5	178.0 (56 %)	24.5 (8 %)	114.0 (36 %)		
B6a	288.0	110.0 (38 %)	18.0 (6 %)	160.0 (56 %)		
D6a	287.5	114.5 (40 %)	20.0 (7 %)	153.0 (53 %)		
C4c	231.5	117.0 (51 %)	16.0 (7 %)	98.5 (43 %)		
C6d	219.5	85.0 (39 %)	29.0 (13 %)	105.5 (48 %)		
D4d	170.0	58.0 (34 %)	12.0 (7 %)	100.0 (5 %)		
E3b	159.0	51.5 (32 %)	15.0 (9 %)	92.5 (58 %)		
D5d	153.5	75.0 (49 %)	15.0 (10 %)	63.5 (4 %)		
E3c	133.0	62.0 (47 %)	11.5 (9 %)	59.5 (4 %)		尾鈴山酸性岩類少量
D4b	131.5	77.0 (59 %)	4.0 (3 %)	50.5 (38 %)		
F3b	118.0	67.0 (57 %)	13.5 (11 %)	37.5 (32 %)	○	尾鈴山酸性岩類少量
B6c	96.5	43.5 (45 %)	8.5 (9 %)	44.5 (46 %)		
E3d	95.0	63.0 (66 %)	6.0 (6 %)	26.0 (27 %)		
F3c	84.5	37.0 (44 %)	6.5 (8 %)	41.0 (49 %)	○	尾鈴山酸性岩類少量
D5c	65.0	15.5 (24 %)	7.0 (11 %)	42.5 (65 %)		尾鈴山酸性岩類少量
D3d	57.5	33.5 (58 %)	6.5 (11 %)	17.5 (30 %)		
D5b	55.0	19.0 (35 %)	4.0 (7 %)	32.0 (58 %)		
D4a	50.0	35.0 (70 %)	5.0 (10 %)	10.0 (20 %)		
B7a	48.0	10.5 (22 %)	4.5 (9 %)	33.0 (69 %)		
B5c	44.5	20.5 (46 %)	3.0 (7 %)	21.0 (47 %)		
E4d	33.5	29.0 (87 %)	2.0 (6 %)	2.5 (7 %)	○	尾鈴山酸性岩類少量
B7c	31.0	7.5 (24 %)	0.0 (0 %)	23.5 (76 %)		
B8b	26.5	6.0 (23 %)	4.0 (15 %)	16.5 (62 %)		
B8a	25.5	6.5 (25 %)	1.5 (6 %)	17.5 (69 %)		
F4a	25.0	22.0 (88 %)	0.0 (0 %)	3.0 (12 %)	○ ○	尾鈴山酸性岩類少量 赤色頁岩1個
A8b	22.5	4.5 (20 %)	0.0 (0 %)	18.0 (80 %)		
A7d	13.5	3.5 (26 %)	0.0 (0 %)	10.0 (74 %)		
B7d	11.0	3.0 (27 %)	0.0 (0 %)	8.0 (73 %)		
F4b	10.0	4.0 (40 %)	4.5 (45 %)	1.5 (15 %)		
F3d	8.5	2.0 (24 %)	4.5 (53 %)	2.0 (24 %)	○	
F4c	8.0	3.5 (44 %)	4.0 (50 %)	0.5 (6 %)		
B8c	7.5	2.5 (33 %)	0.0 (0 %)	5.0 (67 %)		
合計	11815.0	5277.5 (45 %)	999.5 (8 %)	5538.0 (47 %)		

2 集石遺構

この項では、集石遺構の調査方針（第Ⅲ章第3節1で既述）について具体的に述べ、調査上の所見と表5の説明を行う。

【集石遺構範囲の認定】

今回調査における集石遺構の範囲について認定基準を述べる。検出時に認定した集石遺構は、礫が散漫に分布している部分を散礫の範囲とし、礫が密集している部分を集石遺構の範囲と認定した。散礫下に存在する集石遺構は、散礫を一枚一枚剥がすように除去し、礫の密集部分が確認された段階で、その密集部分を集石遺構の範囲として認定した。

【従前の検出状況の記録方法と他の遺構の記録方法】

従前、集石遺構の分類基準は掘込みの有無・配石の有無が主体である。礫の平面的な分布状況は、密度（密か散漫か）が副次的に用いられたに過ぎず、個別の礫に対する分析はされていない。

他の遺構（竪穴住居跡や土坑等）の記録方法を参照すると、検出状況は写真のみであり、完掘状況を図化する。これらの遺構は「土」によって埋没しており、検出面を削平しても遺構の輪郭線が少し変化する程度である。集石遺構は「礫」によって埋没しているため、礫を一つ一つ描く場合、上部が削平されれば、その度合いによって図が異なる。

【平面の記録方法】

検出面における礫個別の位置関係は分類基準の主体ではない。また、集石遺構は散礫下で検出されたものが多く、他の遺構の記録方法も参考にすれば、検出状況の記録は写真のみで充分であろう。

【断面の記録方法】

集石遺構は石蒸し料理に用いる調理施設であるという解釈が一般的である。調理中は集石遺構内に食物や礫が充填されているが、これらのものは調理後に掻き出される。内部に食物を残したまま集石遺構が遺棄される可能性は極めて低いため、遺跡で検出された集石遺構内部の礫は調理後に堆積したものであろう。従って、今回調査における集石遺構の断面記録は、礫の堆積状況は写真により、埋没過程は分層線を描いた断面図によって記録した。

【配石の記録方法】

集石遺構の底面、あるいは壁面に礫が配置された状況が認められた場合、配石であると認定した。配石は人為的に配されたものであり、また、礫の位置関係から分類することも可能であり、分析対象として有効である。従って、配石については検出状況を写真撮影し、平面図には礫を一つ一つ描き、断面見通し図（一方向）を作成した。

【調査中の所見】

調査区の地形は小尾根の端部である。平坦面を中心に集石遺構65基、炉穴7基、土坑3基、石器碎片集中2箇所が特徴的に分布していた（図9）。

以下に集石遺構に関する調査中の所見を挙げる。

①集石遺構はある程度のまとまりをもって分布

具体的な群の認定は難しいが、C4d区とC6d区にまとまりが見られる。これらの中心には大型（掘込みの直径約2m）かつ配石を有する集石遺構があり、その周辺に小規模の集石遺構が分布する。また、これらの集石遺構はほとんど重複することなく分布するという特徴がある。

②集石遺構の周囲に大き目の礫が点在

集石遺構の周囲に大き目の礫が点在していた。明瞭な使用痕はないが、遺物の可能性もある。

③遺構がない空間の存在

①に挙げた集石遺構の群の間には遺構がない空間が存在する。この空間に遺構はないが、散礫が分布し、わずかだが遺物も包含されていた。

④集石遺構と他の遺構の分布

集石遺構・炉穴・土坑は尾根中央部付近の平坦地にのみ分布する。GrEとGr4の交点から東南部分及びGrG以東は急斜面であり、遺構は分布しない。また、E5区・D5d区は緩斜面だが、石器碎片の集中箇所があり、集石遺構の分布範囲と重複しない。集石遺構と炉穴の関係であるが、重複していたのはSI31とSP3のみである。断面観察の結果、SI31が古く、SP3が新しいことが判明した。

【出土遺物と炭化物・炭化材】

集石遺構から出土した土器・石器・炭化材は小破片が多く、量は少ない。遺構内部の礫に混じって出土しており、原位置は保っていない。

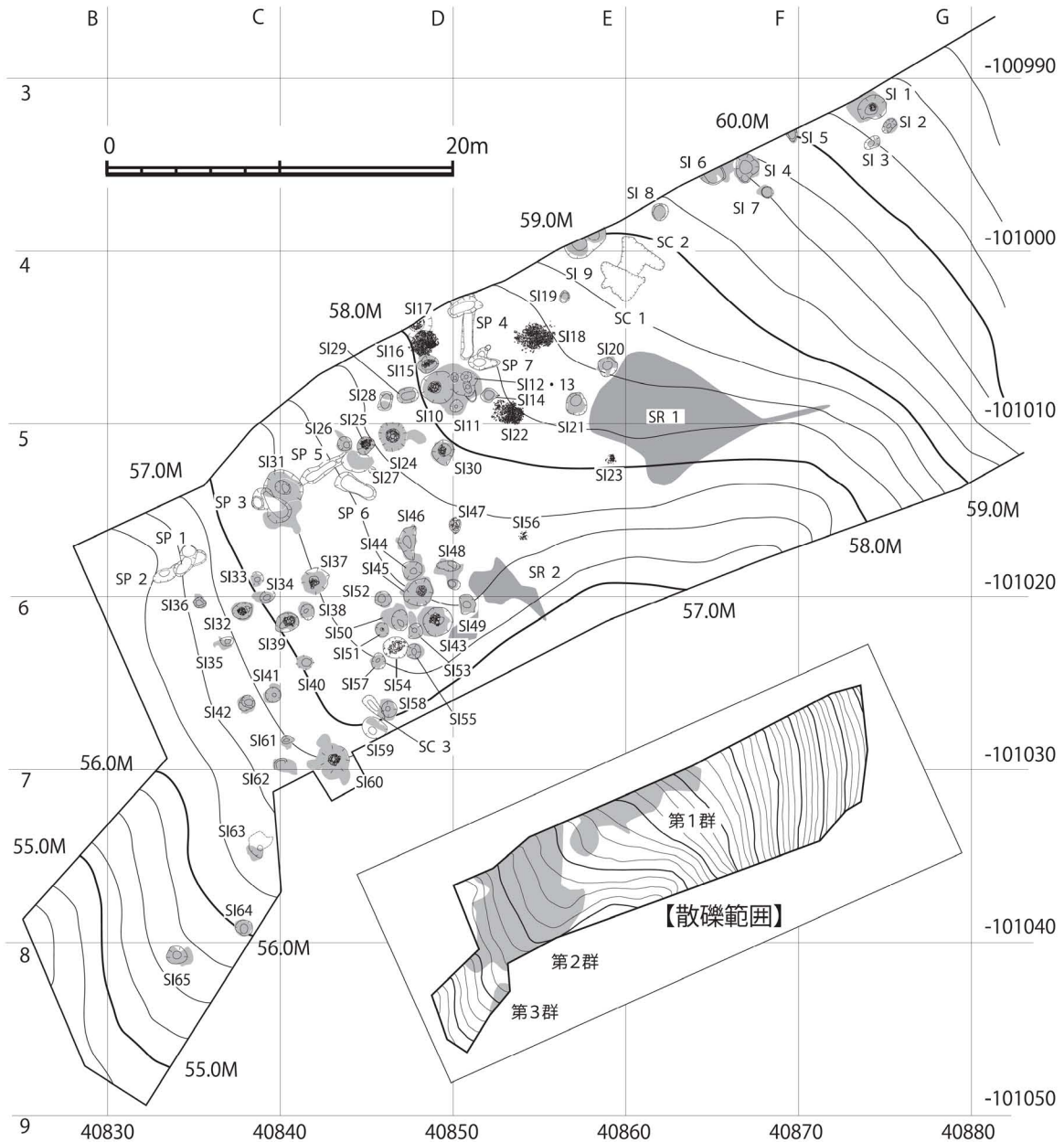


図 10 縄文時代早期遺構分布 (S=1/400)

【集石遺構一覧表の説明】

- 旧遺構番号…調査中に付与した番号である。実測図・写真・遺物注記はこの番号が使われている。
- 検出段階…aは散礫検出時、bは散礫除去後、cはさらに掘り下げた段階で検出したもの。
- 地区…集石遺構の中心または面積的に広く位置している地区である。
- 礫範囲…礫範囲が収まる面積。「()」内は付属土坑の数値。「>」は「以上」を示す。
- 掘込み…長軸を基準に直行する軸の内最長のものを短軸とする。深さは最高所と最低所の差である。

- 礫総重量…内部礫と配石の合計重量の総計である。
- 内部礫…「()」内の数値は内部礫・配石のそれぞれの合計に占める割合である。
- 炭化材…○は検出されたことを示す。◎は自然科学分析に出した資料を示す。
- 遺物…「土」は土器、「石」は石器を示す。

【掲載遺構図について】

平面図のトーン部分は礫範囲を示す。また、掲載遺構図には従来の方で記録したものが一部ある。今回提示した記録方法との比較のために掲載した。

表5 集石遺構一覧

新遺構 番号	旧遺構 番号	検出 段階	地区	礎範囲 (m)		掘込み (m)			配石	炭化材	遺物
				長辺	短辺	長軸	短軸	深さ			
SI01	SI201	b	F3a	2.145	>1.655	1.710	1.410	0.390	○		
SI02	SI202	b	F3b	0.990	0.825	0.990	0.570	0.150			
SI03	SI203	b	F3a	0.750	0.645	1.020	0.660	0.210			
SI04	SI205	b	E3d	1.800	1.440	1.680	1.335	0.345		○	
SI05	SI204	b	E3b	>0.930	>0.675	>0.675	0.660	0.105			
SI06	SI206	b	E3d	2.280	1.200	1.590	>1.020	0.210			土
SI07	SI207	b	E3d	0.945	0.825	0.720	0.690	0.120			土
SI08	SI208	b	E3c	0.960	0.795	1.005	0.960	0.120			
SI09	SI209	b	D3d	2.550	1.110	2.640	>1.230	(0.195)0.210			石
SI10	SI218	b	C4d	3.495	3.000	(1.800)1.980	(1.545)1.860	(0.330)0.330	○	○	土石
SI11	SI304	c	D4c	0.720	0.525	0.750	0.630	0.180			
SI12	SI301	c	D4c	1.215	0.780	0.630	0.645	0.180		○	
SI13	SI302	c	D4c			0.570	0.420	0.135		◎	
SI14	SI303	c	D4	1.050	0.840	1.050	0.840	0.150			土石
SI15	SI216	b	C4d	1.230	1.050	1.260	1.050	0.285	○		
SI16	SI214	b	C4d	1.830	1.695	1.560	1.200	0.510	○	◎	
SI17	SI305	c	C4b	計測せず	計測せず	>1.845	>0.840	0.600	○		
SI18	SI102	a	D4c	2.430	1.740	1.110	1.050	0.270			石
SI19	SI101	a	D4b	0.585	0.480	0.720	0.465	0.150			
SI20	SI210	b	D4d	1.290	1.170	1.155	1.140	0.135			土
SI21	SI211	b	D4d	1.380	1.200	1.320	1.260	0.195			石
SI22	SI213	b	D4c	1.935	1.515	1.270	1.200	0.360	○		
SI23	SI103	b	D5b	1.280	1.180	0.000	0.000	0.000			石
SI24	SI104	a	C5b	(1.170)1.740	(0.810)1.650	(1.170)1.740	(0.810)1.650	(0.180)0.405	○		
SI25	SI105	a	C5a	1.050	0.960	1.050	0.960	0.150	○		土
SI26	SI106	a	C5a	1.590	0.855	0.825	0.840	0.150			土
SI27	SI246	b	C5a	1.650	1.080	1.740	1.200	0.240			土
SI28	SI231	b	C4d	1.110	0.915	1.200	0.780	0.210			
SI29	SI217	b	C4d	1.110	1.050	1.260	0.870	0.345			土石
SI30	SI215	b	C5b	1.455	1.380	1.500	1.290	0.360	○		土
SI31	SI236	b	B5b	3.930	2.010	2.385	>1.680	0.585	○	○	土
SI32	SI121	a	B6b	1.370	1.120	1.200	1.060	0.300	○		土
SI33	SI239	b	B5d	0.825	0.750	0.825	0.750	0.255			石
SI34	SI240	b	B6b	1.320	0.730	1.040	0.660	0.130			
SI35	SI245	b	B6b	1.140	0.885	0.810	0.540	0.105			
SI36	SI108	a	B5d	0.990	0.435	0.750	0.645	0.090			土
SI37	SI238	b	C5c	1.500	1.470	1.650	1.500	0.435			土石
SI38	SI219	b	C6a	1.155	1.005	0.915	0.780	0.285			土
SI39	SI220	b	C6a	1.500	1.155	1.455	1.065	0.195	○	○	土石
SI40	SI221	b	C6a	1.080	0.915	1.080	0.870	0.180			
SI41	SI229	b	B6d	1.320	1.065	0.930	0.900	0.240			
SI42	SI228	b	B6d	1.170	1.140	1.005	0.840	0.180			
SI43	SI233	b	C6b	1.950	1.755	1.710	1.650	0.330	○	○	石
SI44	SI112	a	C5d	2.205	1.830	1.800	1.500	0.390	○	◎	土
SI45	SI232	b	C5d	1.590	1.230	1.200	1.080	0.135			土
SI46	SI113	a	C5d	2.100	1.470	2.010	0.990	0.150			土石
SI47	SI109	a	C5d	0.450	0.320	0.460	0.360	0.020	○		
SI48	SI111	a	C5d	1.950	1.800	(0.750)1.380	(0.540)0.630	(0.060)0.210			土
SI49	SI243	b	D6a	1.140	0.960	1.200	1.005	0.120			土
SI50	SI234	b	C6b	1.620	1.575	1.200	0.900	0.135			土
SI51	SI235	b	C6b	0.900	0.780	0.825	0.750	0.420			土
SI52	SI244	b	C5d	1.125	0.900	0.975	0.900	0.210			土
SI53	SI114	a	C6b	1.665	0.810	0.990	0.855	0.090			
SI54	SI223	b	C6b	1.380	0.750	1.470	1.230	0.195			石
SI55	SI224	b	C6b	1.050	1.020	0.915	0.810	0.240			
SI56	SI119	a	D5c	1.500	1.030	0.000	0.000	0.000			
SI57	SI230	b	C6a	1.005	0.900	0.960	0.780	0.135			土石
SI58	SI222	b	C6d	1.410	1.230	0.960	0.930	0.255			石
SI59	SI242	b	C6c	1.320	0.480	1.470	1.185	0.180			土
SI60	SI116	a	C6c	3.240	2.400	1.680	1.695	0.390	○		土石
SI61	SI241	b	C6c	0.915	0.810	0.765	0.450	0.075			
SI62	SI117	a	C6c	1.650	1.050	0.840	>0.315	0.135			石
SI63	SI225	b	B7b	>0.810	>1.050	>0.585	>0.720	>0.285			土
SI64	SI226	b	B7d	1.065	1.020	1.030	0.915	0.135			
SI65	SI118	a	B8a	1.590	1.200	1.230	1.050	0.165			

表6 集石遺構計量結果

遺構 番号	礫総重 量(kg)	内部礫重量(kg)				配石重量(kg)				備考
		合計	小礫	大礫	赤化礫	合計	小礫	大礫	赤化礫	
SI01	449.5	433.5	355.5 (82%)	7.0 (2%)	71.0 (16%)	16.0			16.0 (100%)	
SI02	10.5	10.5	2.5 (24%)		8.0 (76%)					
SI03	12.0	12.0	4.0 (33%)	1.0 (8%)	7.0 (58%)					
SI04	234.5	234.5	59.5 (25%)	19.5 (8%)	155.5 (66%)					
SI05	30.0	30.0	10.0 (33%)		20.0 (67%)					
SI06	50.0	50.0	17.5 (35%)	2.0 (4%)	30.5 (61%)					
SI07	19.0	19.0	6.0 (32%)		13.0 (68%)					
SI08	12.0	12.0	2.0 (17%)		10.0 (83%)					
SI09	46.0	46.0	25.5 (55%)	4.0 (9%)	16.5 (36%)					
SI10	366.0	350.5	170.0 (49%)	32.0 (9%)	148.5 (42%)	15.5			15.5 (100%)	
SI11										計量せず
SI12										SI13と統合
SI13	17.0	17.0	7.0 (41%)		10.0 (59%)					SI12と統合
SI14										計量せず
SI15	90.5	78.0	27.0 (35%)	6.0 (8%)	45.0 (58%)	12.5	1.5 (12%)	7.0 (56%)	4.0 (32%)	
SI16	364.0	320.5	120.0 (37%)	58.0 (18%)	142.5 (44%)	43.5		4.5 (10%)	39.0 (90%)	
SI17										
SI18	241.5	241.5	44.0 (18%)	36.5 (15%)	161.0 (67%)					
SI19	14.5	14.5	8.0 (55%)	2.5 (17%)	4.0 (28%)					
SI20	4.0	4.0	1.0 (25%)		3.0 (75%)					
SI21	14.0	14.0	5.0 (36%)	2.0 (14%)	7.0 (50%)					
SI22	283.0	248.0	46.0 (19%)	21.0 (8%)	181.0 (73%)	35.0		1.0 (3%)	34.0 (97%)	
SI23	27.0	27.0	1.0 (4%)	1.0 (4%)	25.0 (93%)					
SI24	469.0	414.0	128.0 (31%)	40.0 (10%)	246.0 (59%)	55.0			55.0 (100%)	
SI25	80.0	61.5	14.0 (23%)	10.0 (16%)	37.5 (61%)	18.5	2.5 (14%)	3.5 (19%)	12.5 (68%)	
SI26	67.5	67.5	24.0 (36%)	7.0 (10%)	36.5 (54%)					
SI27	27.0	27.0	11.5 (43%)	4.5 (17%)	11.0 (41%)					
SI28	15.0	15.0	8.0 (53%)	1.0 (7%)	6.0 (40%)					
SI29	67.5	67.5	27.5 (41%)	2.5 (4%)	37.5 (56%)					
SI30	151.0	138.5	76.0 (55%)	15.5 (11%)	47.0 (34%)	12.5		1.0 (8%)	11.5 (92%)	
SI31	204.5	158.5	43.5 (27%)	20.0 (13%)	95.0 (60%)	46.0	1.0 (2%)	7.0 (15%)	38.0 (83%)	
SI32	71.5	58.5	17.0 (29%)	15.5 (26%)	26.0 (44%)	13.0	5.0 (38%)		8.0 (62%)	
SI33	39.5	39.5	1.5 (4%)		38.0 (96%)					
SI34	26.5	26.5	5.0 (19%)	4.5 (17%)	17.0 (64%)					
SI35	27.5	27.5	1.0 (4%)	2.5 (9%)	24.0 (87%)					
SI36	17.5	17.5	7.5 (43%)	1.0 (6%)	9.0 (51%)					
SI37	134.5	117.5	47.5 (40%)	3.0 (3%)	67.0 (57%)	17.0		2.0 (12%)	15.0 (88%)	
SI38	27.0	27.0	8.5 (31%)	1.5 (6%)	17.0 (63%)	0.0				
SI39	128.0	82.0	19.0 (23%)	6.0 (7%)	57.0 (70%)	46.0	2.0 (4%)	8.0 (17%)	36.0 (78%)	
SI40	83.5	83.5	44.0 (53%)		39.5 (47%)					
SI41	43.0	43.0	19.5 (45%)	1.5 (3%)	22.0 (51%)					
SI42	72.5	72.5	17.5 (24%)	7.0 (10%)	48.0 (66%)					
SI43	253.5	253.5	85.5 (34%)	23.5 (9%)	144.5 (57%)					
SI44	419.0	399.5	120.5 (30%)	69.5 (17%)	209.5 (52%)	19.5			19.5 (100%)	
SI45	121.0	121.0	18.0 (15%)	3.5 (3%)	99.5 (82%)					
SI46	111.0	111.0	27.0 (24%)	11.5 (10%)	72.5 (65%)					
SI47	4.5					4.5	0.5 (11%)		4.0 (89%)	
SI48	20.5	20.5	2.0 (10%)		18.5 (90%)					
SI49	8.5	8.5	4.5 (53%)		4.0 (47%)					
SI50	12.5	12.5	3.0 (24%)	1.5 (12%)	8.0 (64%)					
SI51	79.0	55.5	13.0 (23%)	6.5 (12%)	36.0 (65%)	23.5			23.5 (100%)	
SI52	9.5	9.5	4.5 (47%)		5.0 (53%)					
SI53	20.0	20.0	6.0 (30%)	3.0 (15%)	11.0 (55%)					
SI54	4.0	4.0			4.0 (100%)					
SI55	31.0	31.0	5.0 (16%)	3.0 (10%)	23.0 (74%)					
SI56	19.0	19.0	1.0 (5%)	3.5 (18%)	14.5 (76%)					
SI57	23.5	23.5	6.0 (26%)		17.5 (74%)					
SI58	36.5	36.5	5.5 (15%)		31.0 (85%)					
SI59	28.5	28.5	8.0 (28%)	2.5 (9%)	18.0 (63%)					
SI60	436.5	399.0	158.5 (40%)	63.0 (16%)	177.5 (44%)	37.5			37.5 (100%)	
SI61	19.5	19.5	9.0 (46%)	2.5 (13%)	8.0 (41%)					
SI62	26.5	26.5	4.5 (17%)		22.0 (83%)					
SI63	35.0	35.0	2.0 (6%)		33.0 (94%)					
SI64	23.5	23.5	7.0 (30%)	2.0 (9%)	14.5 (62%)					
SI65	486.0	486.0	178.0 (37%)	28.0 (6%)	280.0 (58%)					
合計	6266.0	5850.5	2100.5 (36%)	559.0 (10%)	3191.0 (55%)	415.5	12.5 (3%)	34.0 (8%)	369.0 (89%)	

【SI 1】

(調査区外)

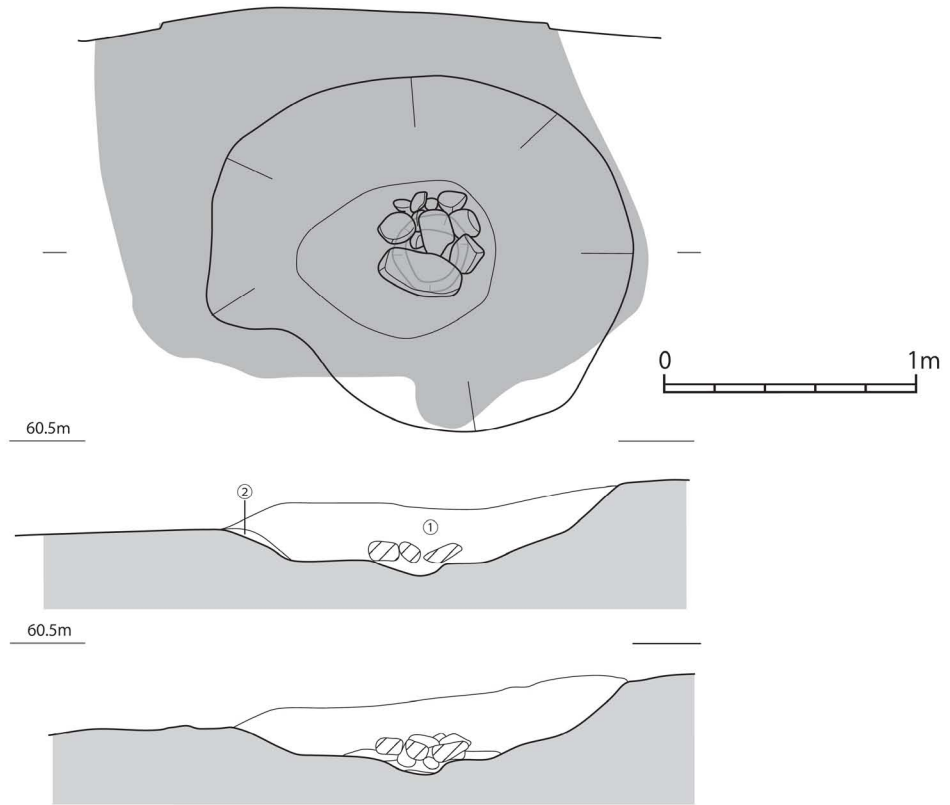
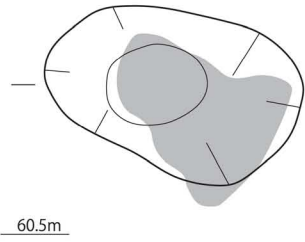
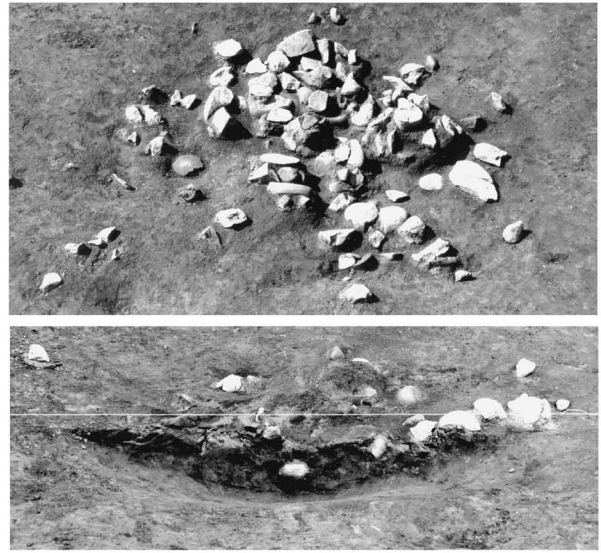
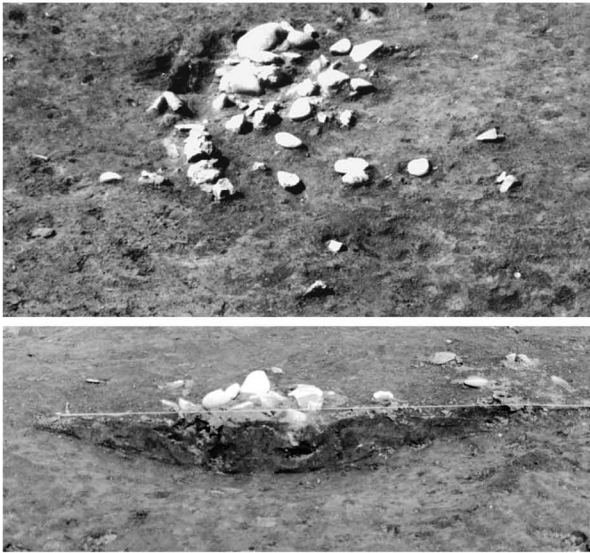
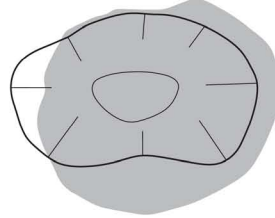


図 11 縄文時代早期集石遺構 1 (S=1/30)

【SI 3】



【SI 2】



【SI 4】

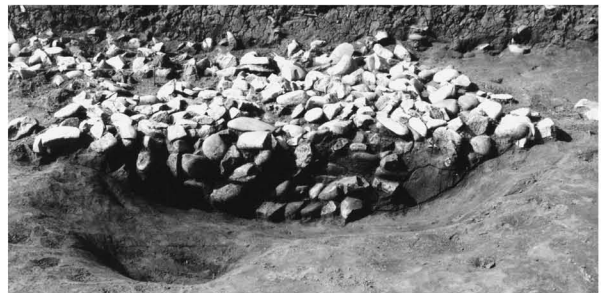
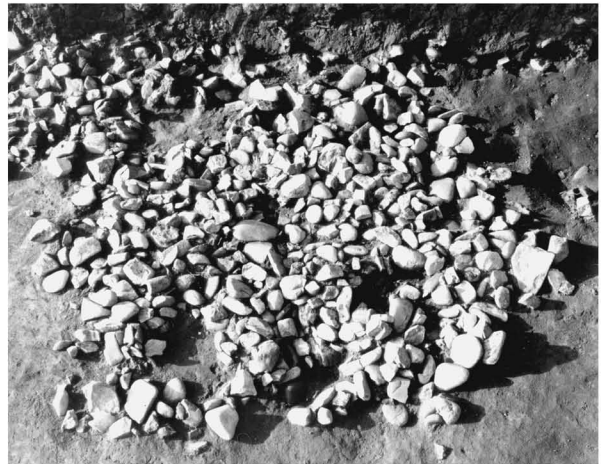
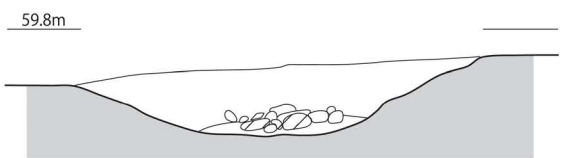
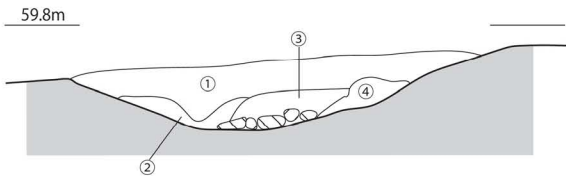
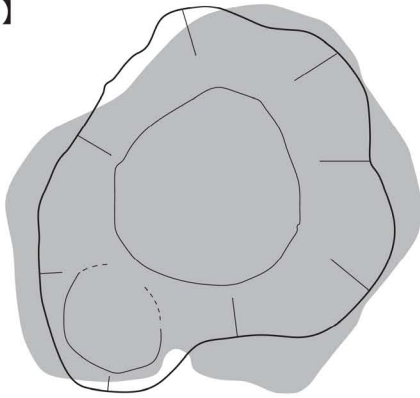
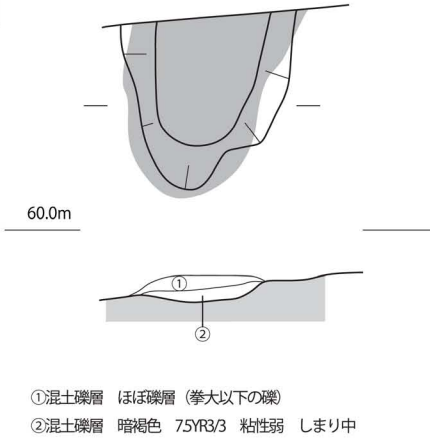


图 12 縄文時代早期集石遺構 2 (S=1/30)

【SI 5】



【SI 6】

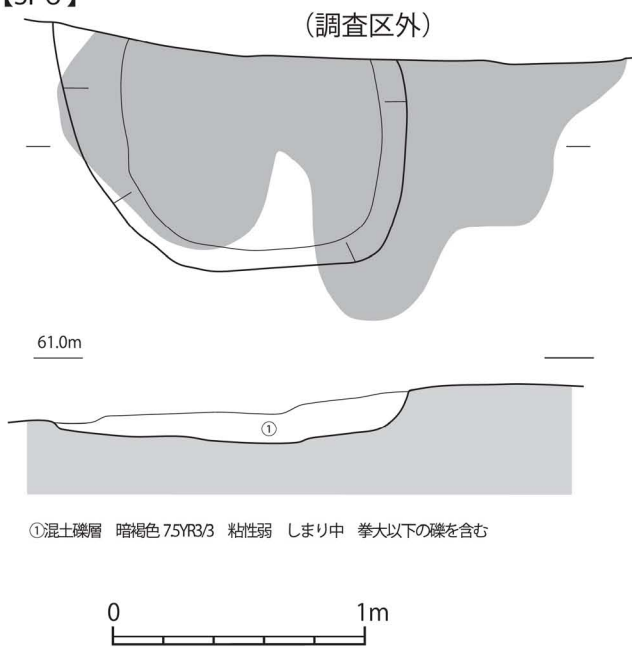
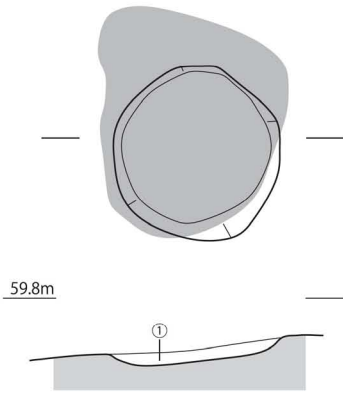


図 13 縄文時代早期集石遺構 3 (S=1/30)

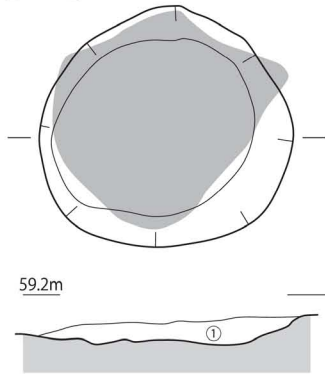
【SI 7】



①混土礫層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり中 拳大以下の礫を含む。



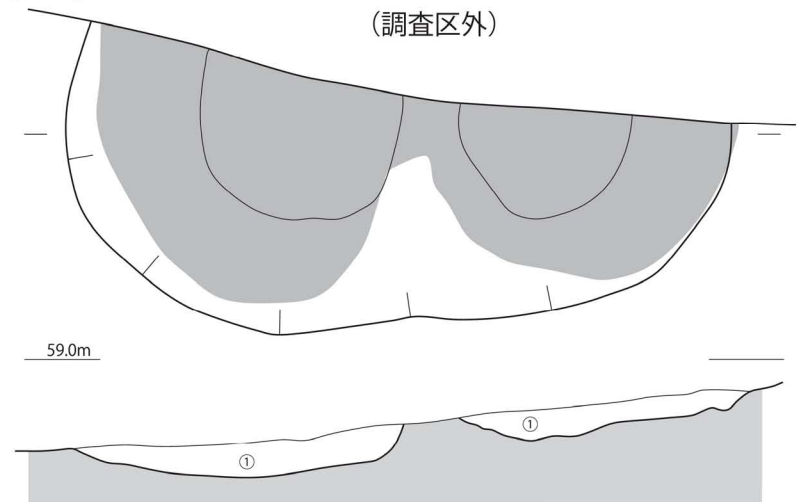
【SI 8】



①混土礫層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり中
拳大以下の礫を多く含む



【SI 9】



【SI 9】

①混土礫層 暗褐色 75YR3/4 粘性弱 しまり中 拳大以下の礫を数個含む。

【SI 1】

①混土礫層 黒褐色 75YR3/2 粘性弱 しまり強 白色粒を含み 拳大以下の礫を密に含む
②土層 褐色 75YR4/3 粘性弱 しまり強

【SI 2】

①混土礫層 黒褐色 75YR3/2 粘性弱 しまり強 礫を疎らに含む

【SI 3】

①混土礫層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり中 礫を疎らに含む

【SI 4】

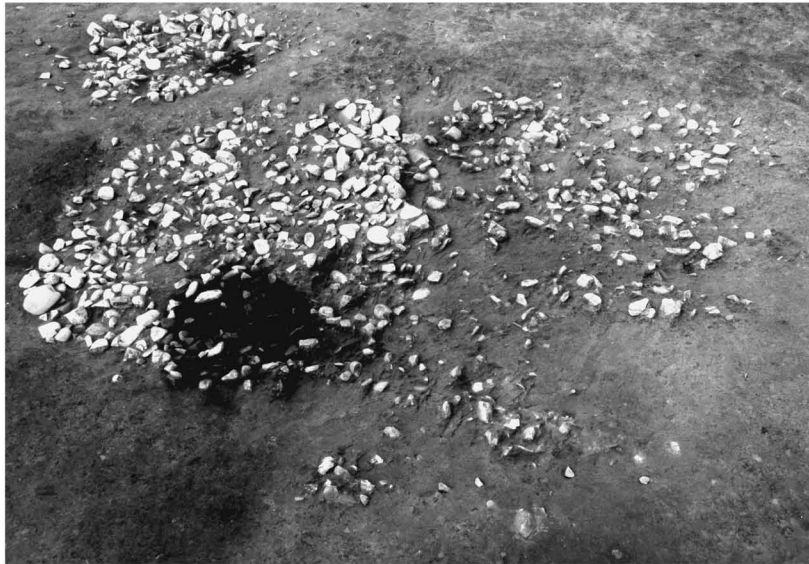
①混土礫層 黒褐色 75YR3/2 粘性弱 しまり強 白色粒を含み拳大以下の礫を多量に含む。

②土層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり強 礫含まず

③混土礫層 礫は拳大以下。

④土層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり強 礫含まず

図 14 縄文時代早期集石遺構 4 (S=1/30)



【S10】

- ①混土礫層 黒褐色 10YR3/2 粘性中 しまり強 拳大以下の赤変した礫を密に含む
- ②混土礫層 黒褐色 10YR2/2 粘性中 しまり強 拳大以下の礫を疎らに含み、炭粒を若干含む
- ③混土礫層 黒褐色 10YR2/3 粘性中 しまり強 拳大以下の礫を疎らに含み (②層より多し)、炭粒を若干含む
- ④土層 暗褐色 10YR3/3 粘性中 しまり強 炭粒を若干含む

【S11】

- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性中 しまり中 拳大以下の礫を疎らに含み、炭粒が若干混じる

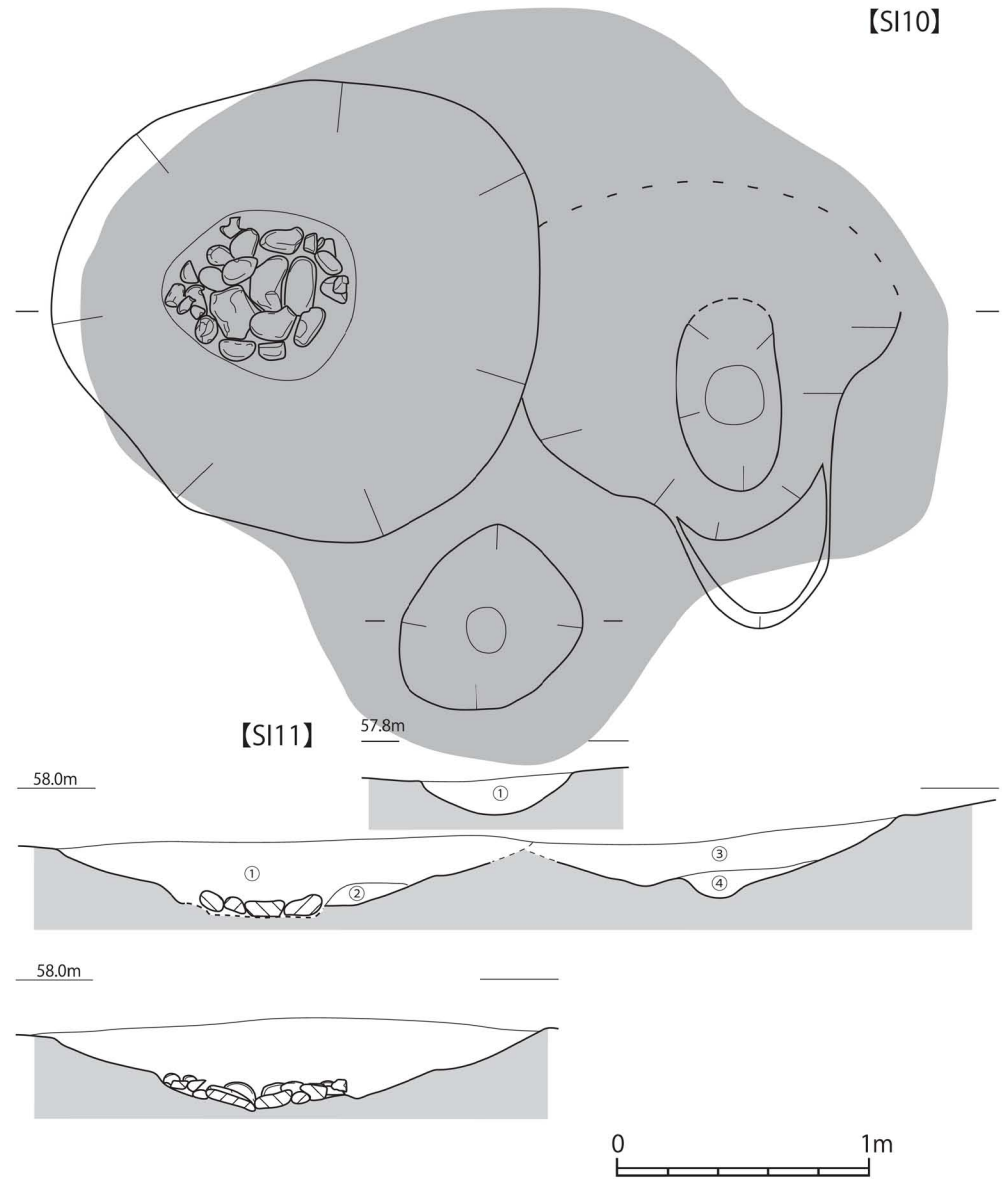


図 15 縄文時代早期集石遺構 5 (S=1/30)

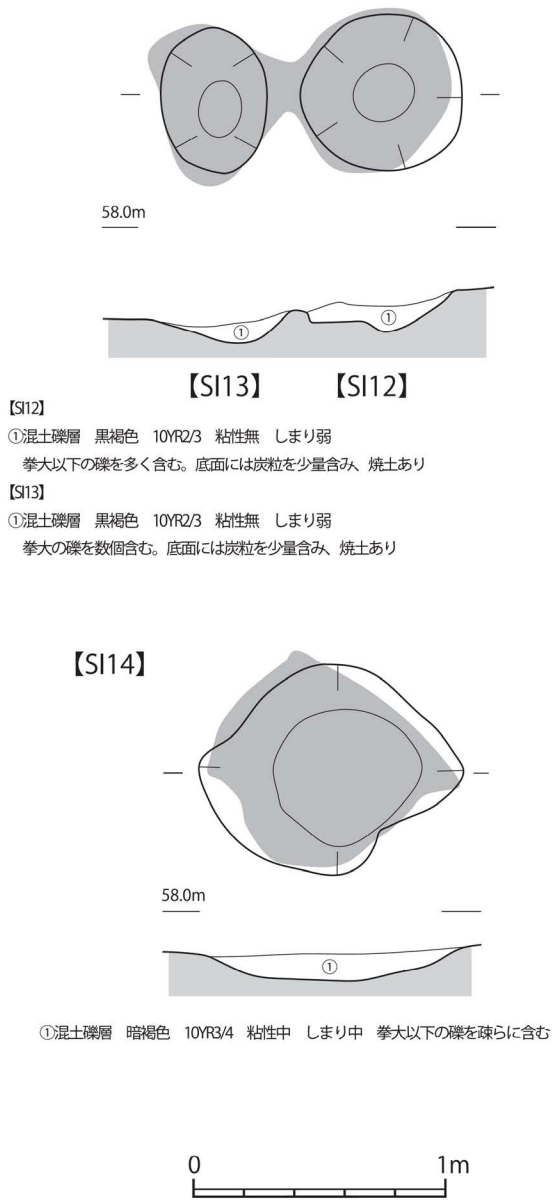


図 16 縄文時代早期集石遺構 6 (S=1/30)

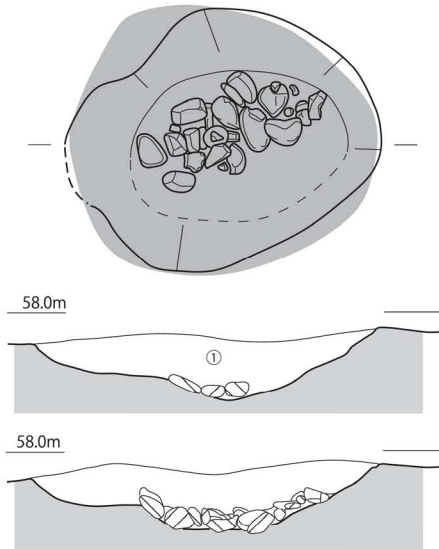
【SI10 (図 15)】

SI10 は散礫除去後に検出された。検出面における礫の分布は、密な部分と疎らな部分があったが、完全に分離することができなかったため、全ての範囲を集石遺構とした。しかし、半截したところ、配石を有する掘込みと配石の無い掘込みが若干重複して存在していたことが判明した。断面観察の結果、これらの掘込みの先後関係は明確ではないが、遺構内部の礫の状況から配石のない掘込みの方が古いと考えられる。配石がない掘込みは底面中央で2段になっており、もう一方の掘込みと構造が似る。また、平面形は円ではなく、浅い凹みが張り出す。

【SI11 (図 15)】

SI11 は SI10 調査終了後、全体を掘り下げた段階で検出された。SI11 の位置は、SI10 の礫範囲のうち、疎らな部分と重複する。このため、SI10 検出時に SI11 を認識できなかった可能性が高い。従って、検出層位は一段階古いが、掘込み面は SI10 とほぼ同じであったと考えられる。SI13 も散礫除去後に検出された集石遺構より古い層位で検出されたが、出土した炭化材の年代測定結果(第V章参照)から他の集石遺構より新しい年代がでており、検出層位と年代測定結果が一致しない状況を示す。

【SI15】



①混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性無 しまり無
拳大かやや大きい礫を密に含む。尾鈴山酸性岩類を若干含む。



【SI16】

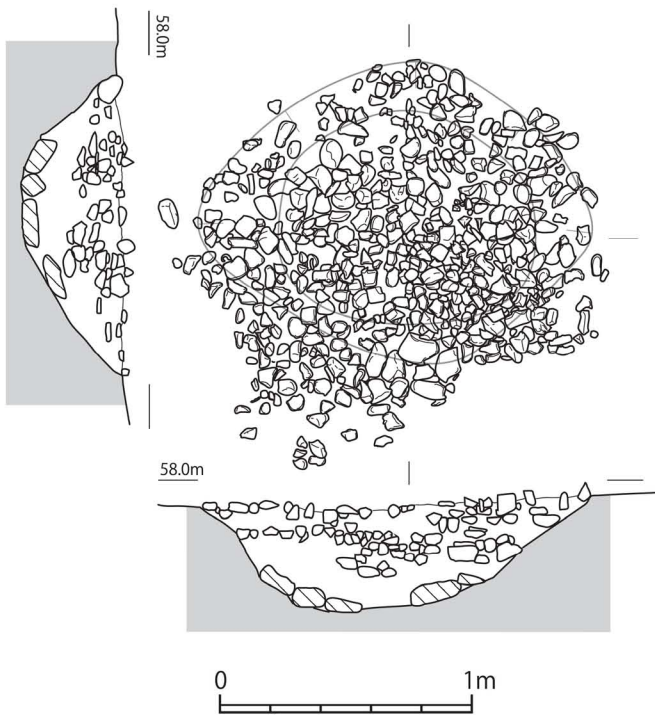
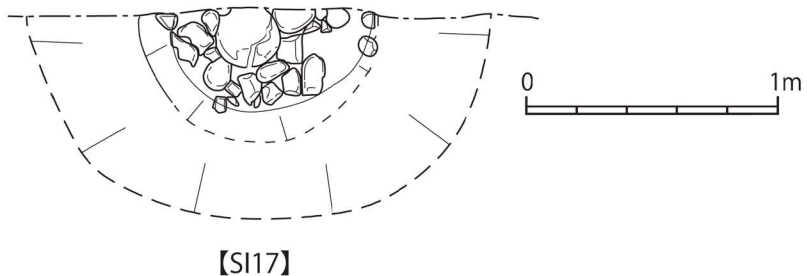
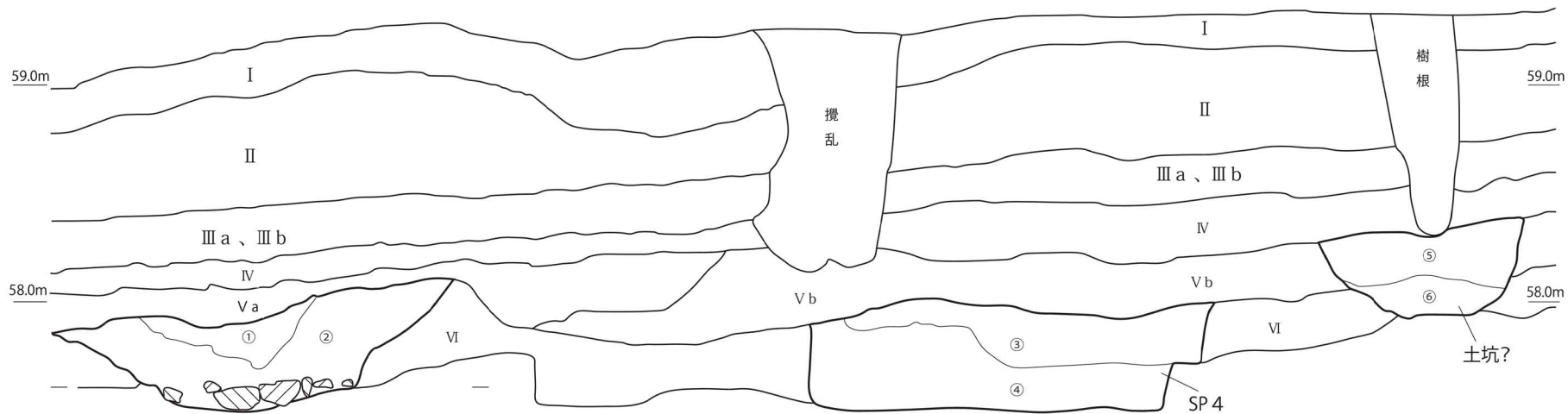


図 17 縄文時代早期集石遺構 7 (S=1/30)



I～VI…基本層序（「表2 基本層序」参照）

【SI17】

①土層 黒褐色 7.5YR3/2 粘性弱 しまり強 礫含まず、炭粒を多く含む。

②混土礫層 黒褐色 10YR2/2 粘性弱 しまり強 拳大以上の礫を少量、拳大以下を多少に含み、炭粒を多く含む。

【SP 4】

③図43 【SP 4】 ②と同

④図43 【SP 4】 ③と同

【土坑?】

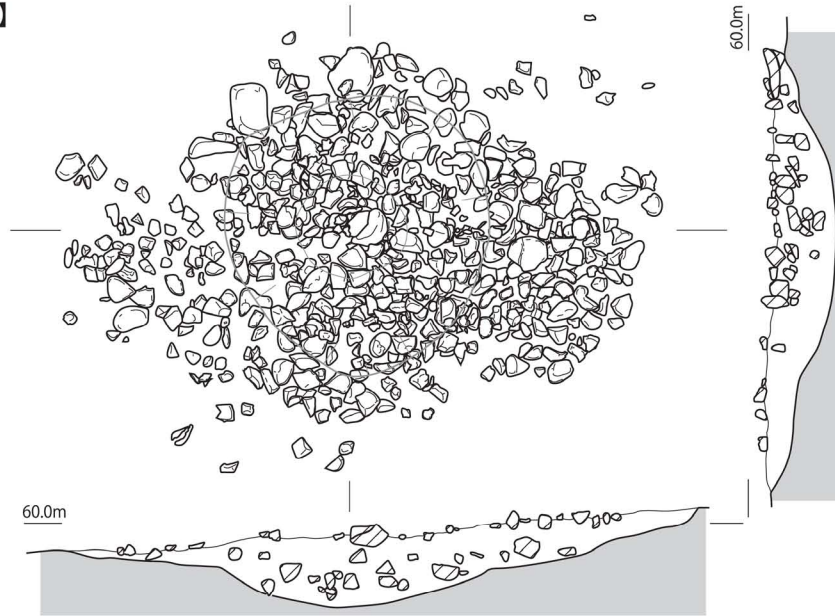
⑤土層 暗褐色 10YR3/4 粘性中 しまり強

⑥土層 黒褐色 10YR2/3 粘性弱 しまり強 炭粒多し。



図18 縄文時代早期集石遺構8 (S=1/30)

【SI18】



【SI23】

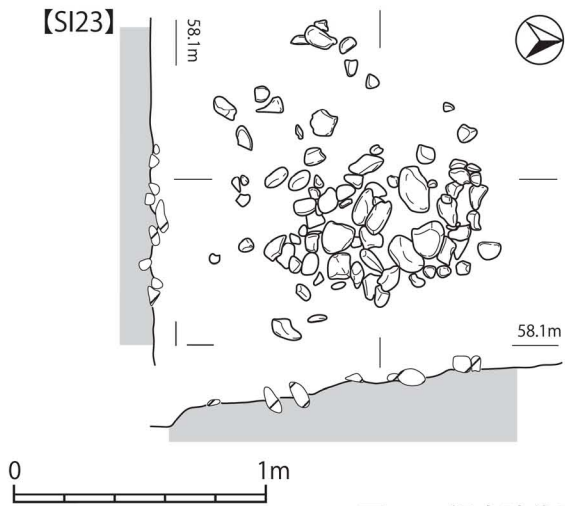
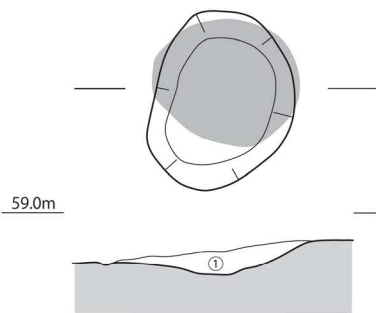
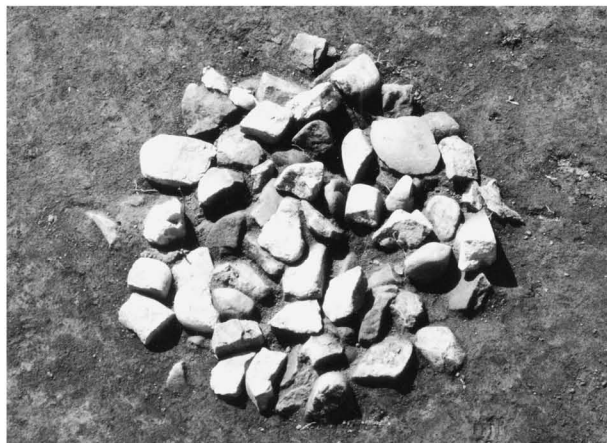


図 19 縄文時代早期集石遺構 9 (S=1/30)

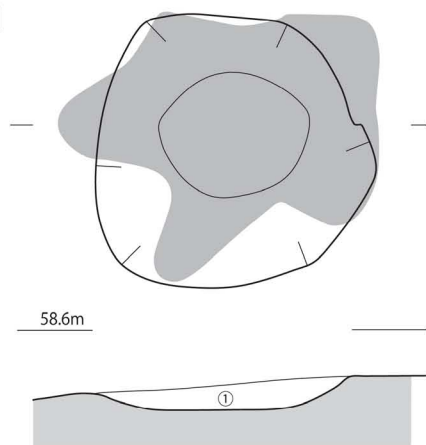
【SI19】



①混土礫層 暗褐色 75YR3/4 粘性弱 しまり中 拳大以下の礫を数個含む。



【SI20】

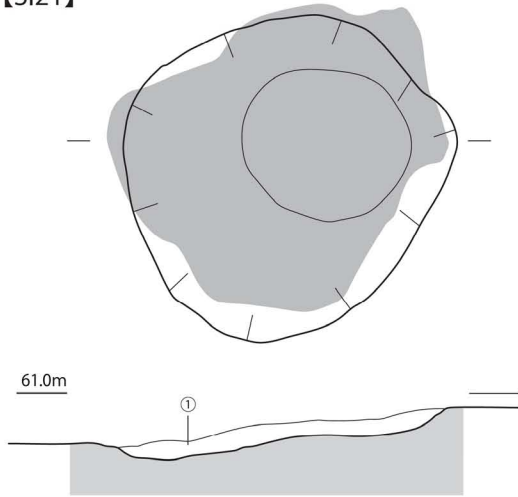


①混土礫層 褐色 10YR4/4 粘性無 しまり強

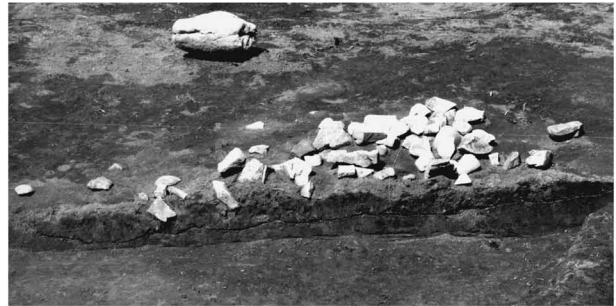


図 20 縄文時代早期集石遺構 10 (S=1/30)

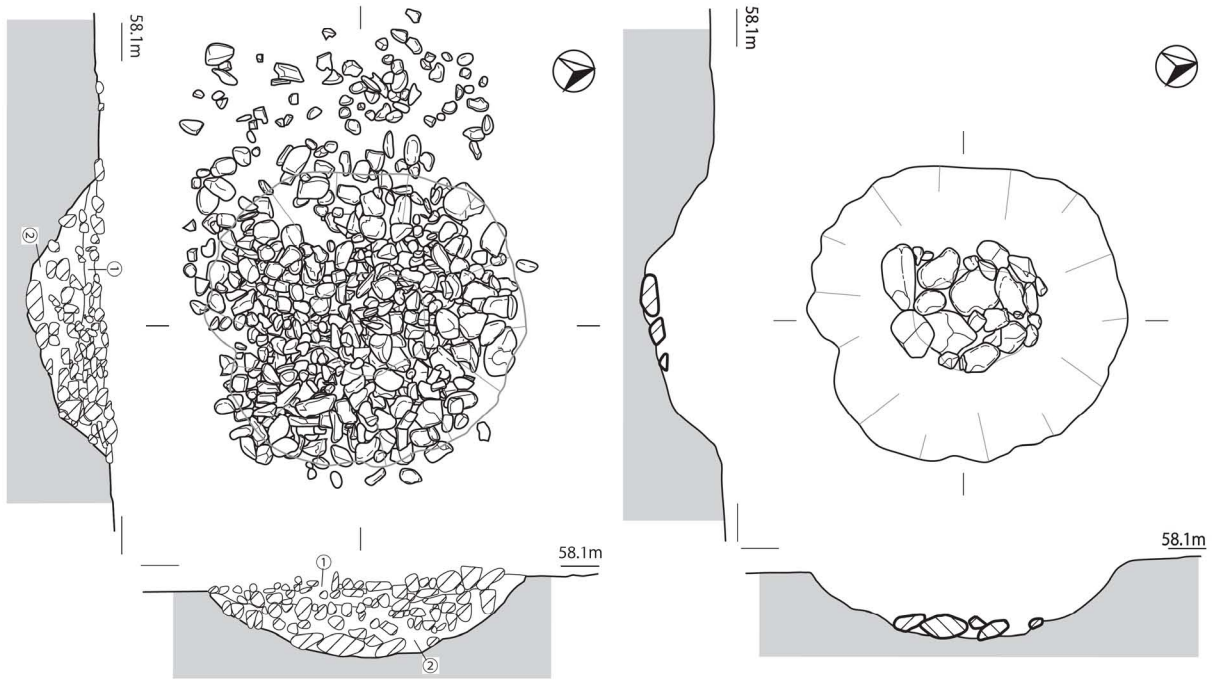
【SI21】



①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性無 しまり強 拳大以下の礫3個を含む



【SI22】



①混土礫層 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘性弱 しまり無 炭化物を少量含む
 ②混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性やや強 しまり強 1cm以内の炭化物を含む

図 21 縄文時代早期集石遺構 11 (S=1/30)

【SI24】

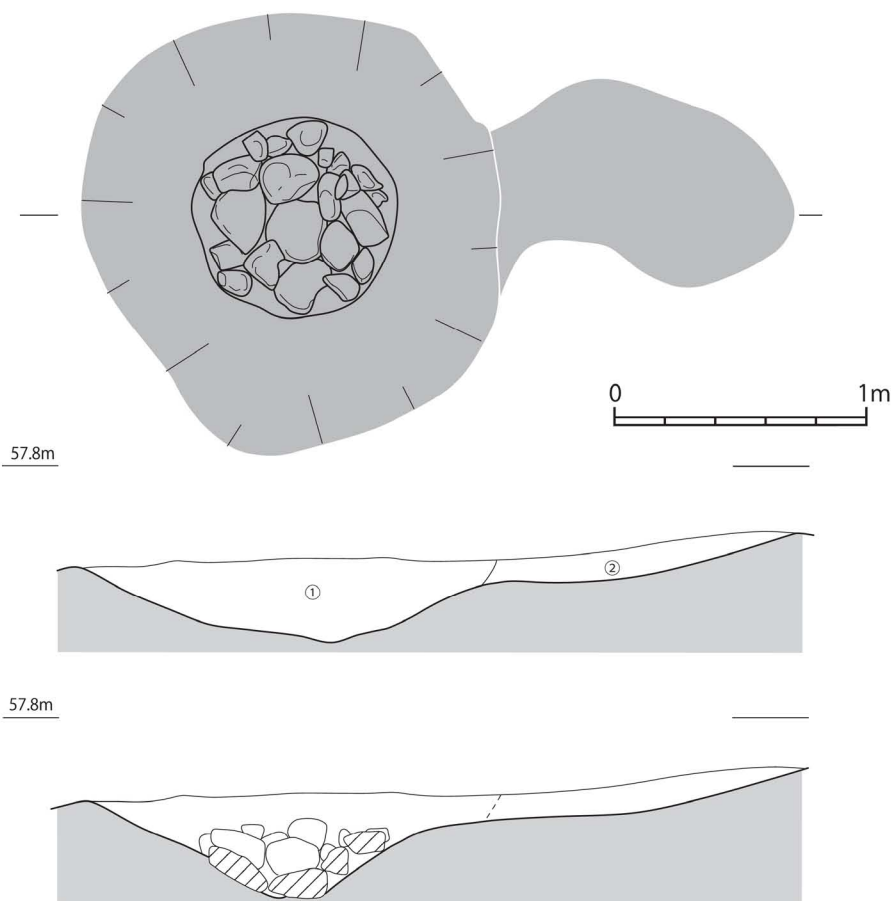


図 22 縄文時代早期集石遺構 12 (S=1/30)

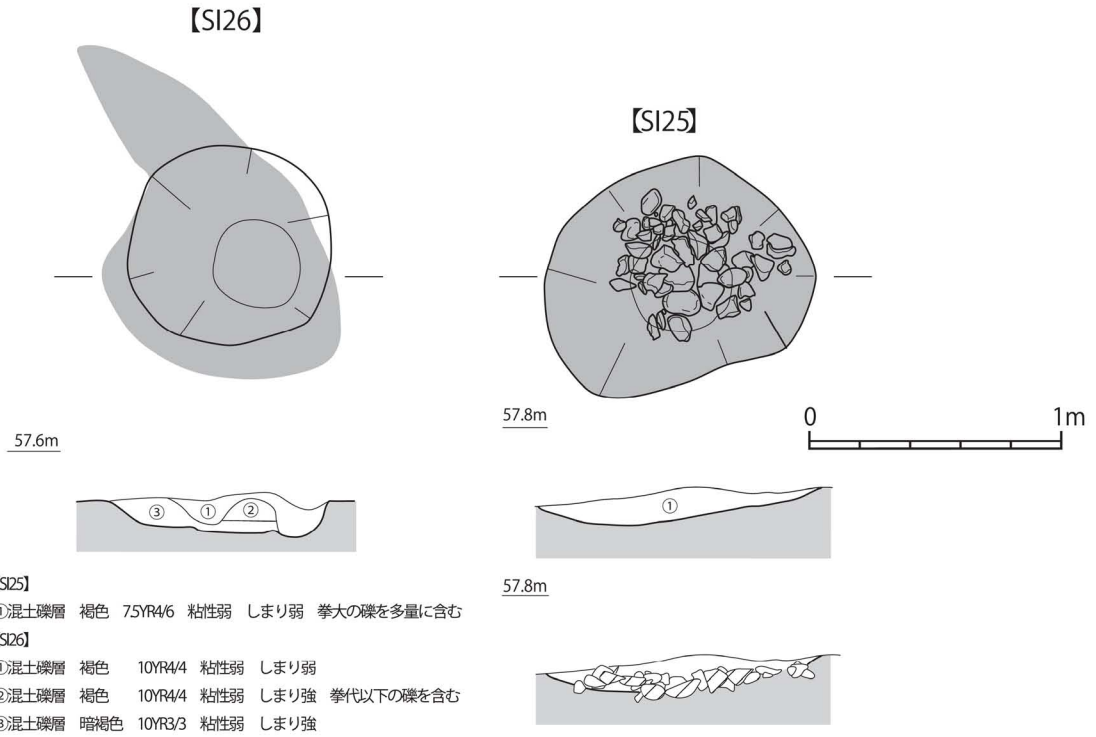
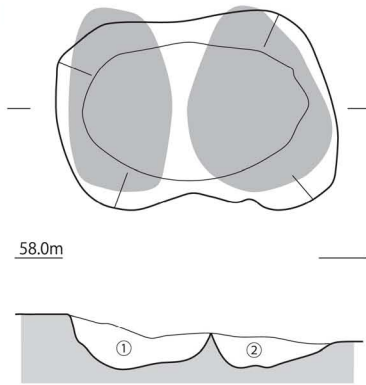


図 23 縄文時代早期集石遺構 13 (S=1/30)

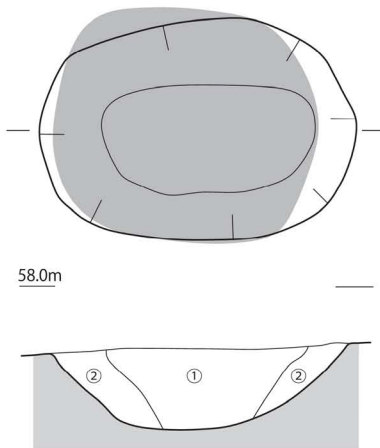
【SI28】



- ①混土礫層 黒褐色 10YR2/3 粘性弱 しまり無 親指大の礫を1個含む
- ②混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性弱 しまり無



【SI29】

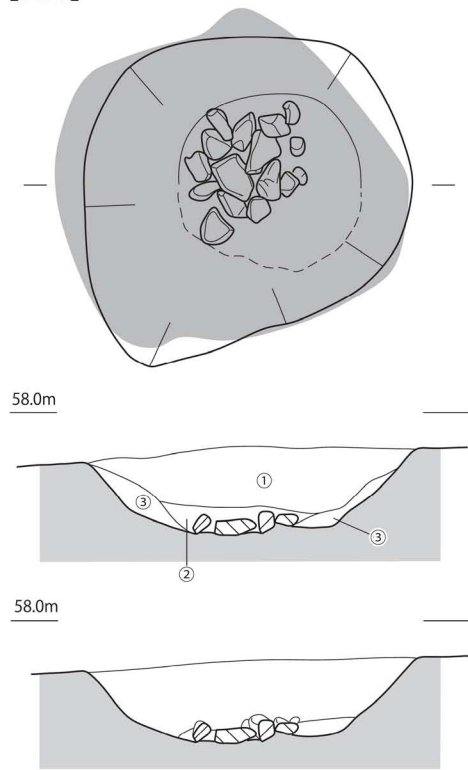


- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性無 しまり無
拳大～人頭大以下の礫を少量含み、小礫を多量に含む。礫密度は高い。
- ②混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性無 しまり無
拳大以下の礫を疎らに含む



図 24 縄文時代早期集石遺構 14 (S=1/30)

【SI30】



【SI27】

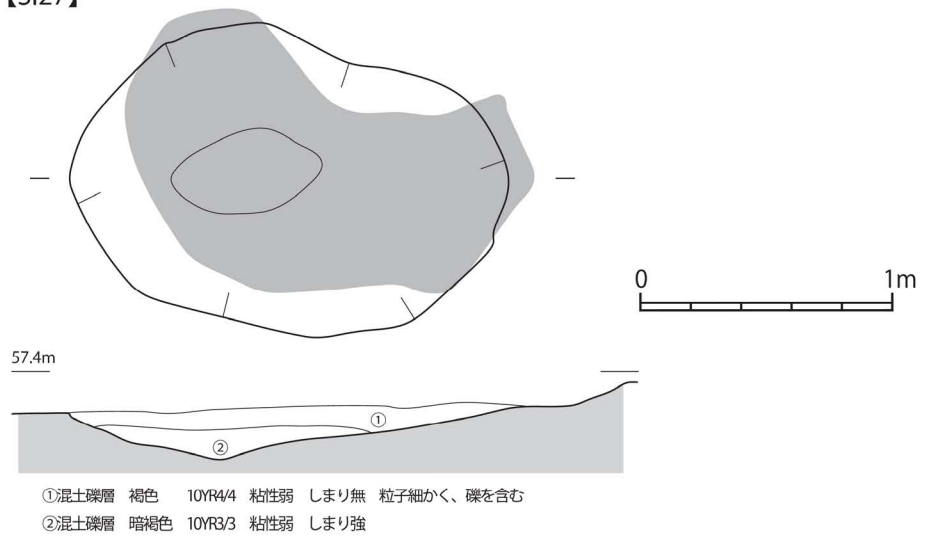


図 25 縄文時代早期集石遺構 15 (S=1/30)

【SI24】

- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性弱 しまり強
大小様々な礫を含み炭化物を少量含む
- ②混土礫層 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘性弱 しまり強 礫を少量含む

【SI30】

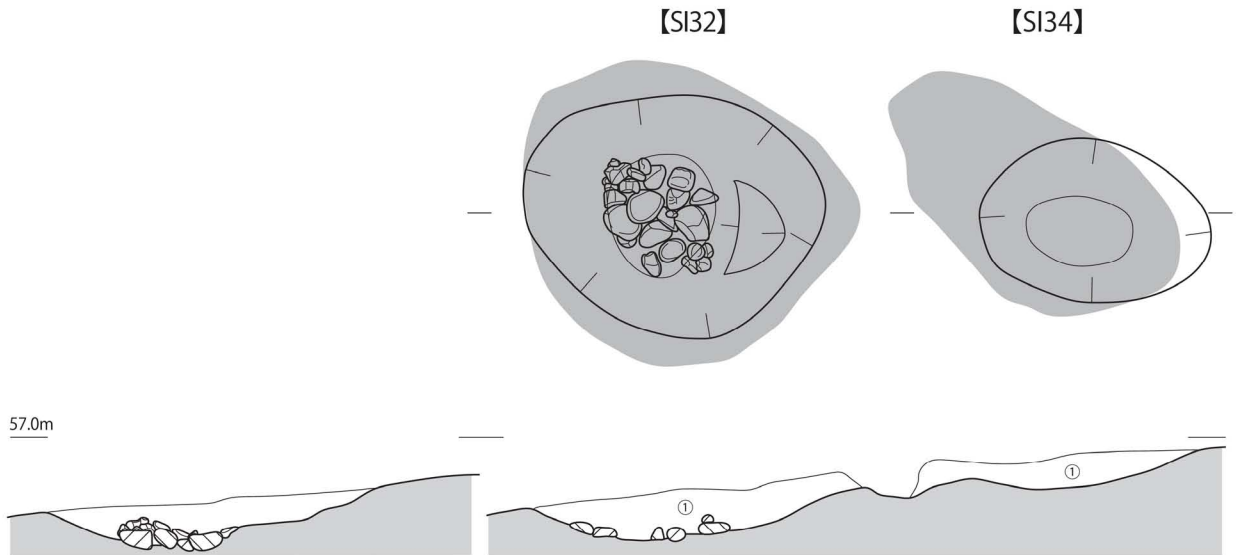
- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性無 しまり無
拳大以下の円・角礫を密に含む。赤変し、破碎されたもの多し。
- ②混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性無 しまり無 拳大よりやや大きい礫を含む。
- ③土層 黒褐色 10YR2/2 粘性無 しまり無 炭化物を含む。礫は含まれない。

【SI32】

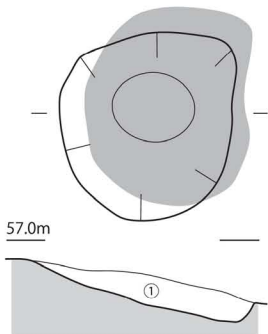
- ①混土礫層 黒褐色 10YR2/2 粘性弱 しまり強
拳大以下の礫を含み、ほとんどが赤変している。

【SI34】

- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性弱 しまり中
拳大以下の礫を含み、ほとんどが赤変している。



【SI33】

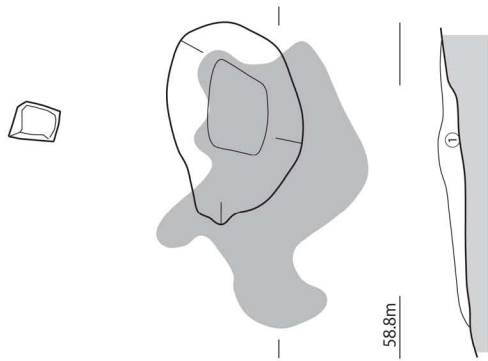


①混土礫層 褐色 10YR4/6
粘性中 しまり中
拳大の礫を若干、拳大以下の
礫を多量に含む。殆ど赤変し
ていない。

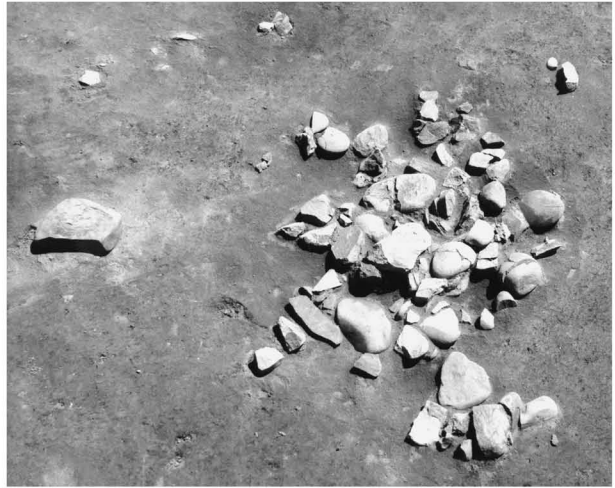


図 26 縄文時代早期集石遺構 16 (S=1/30)

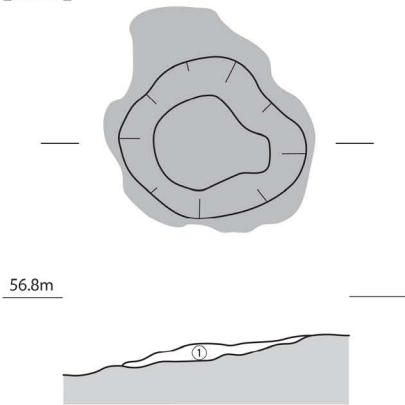
【SI35】



①混土礫層 粘性無 しまり無 垂円礫多し。半分以上は赤化。



【SI36】

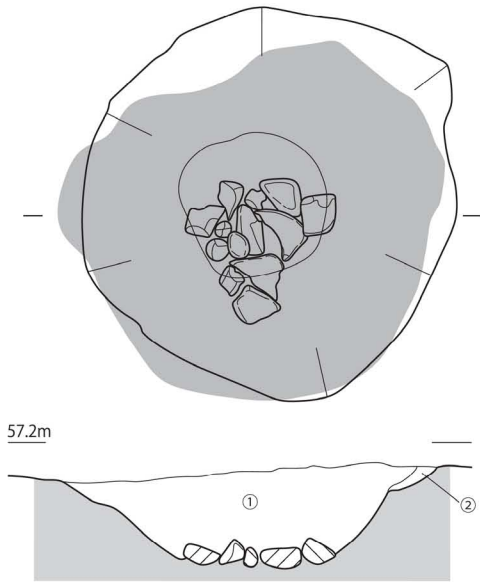


①混土礫層 褐色 75YR4/6 粘性弱 しまり無 樹根の影響で地山が変色したが



図 27 縄文時代早期集石遺構 17 (S=1/30)

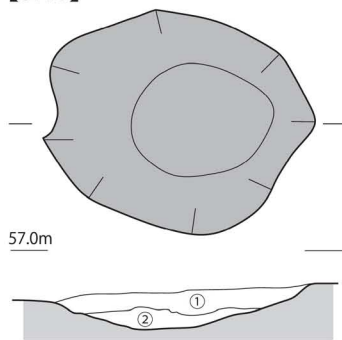
【SI37】



- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性中 しまり弱
10cm 前後の赤化した角礫・亜角礫を密に含む。礫の密度は中央部ほど高い。
- ②土層 褐色 10YR4/4 粘性中しまり弱 炭化物を少量含む。



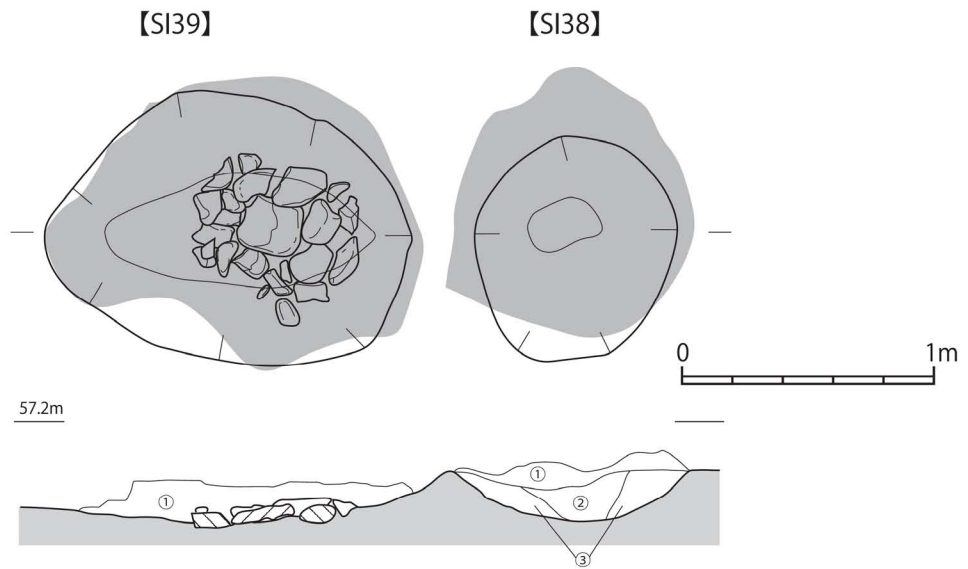
【SI40】



- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性やや弱 しまりやや強 炭化物を僅かに含む
- ②土層 褐色 10YR4/5 粘性やや弱 しまり中



図 28 縄文時代早期集石遺構 18 (S=1/30)



【SI38】

- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性無 しまり中 10cm 弱の角礫・亜角礫を密に含む。SI39 に比して赤化の度合いが低い。
- ②土層 暗褐色 10YR3/3 粘性中 しまりやや強 炭粒・焼土粒を少量含む。
- ③土層 暗褐色 10YR3/3 粘性中 しまり中

【SI39】

- ①混土礫層 褐色 10YR4/6 粘性無 しまり弱 10cm 前後の赤化した亜角礫を密に含む。

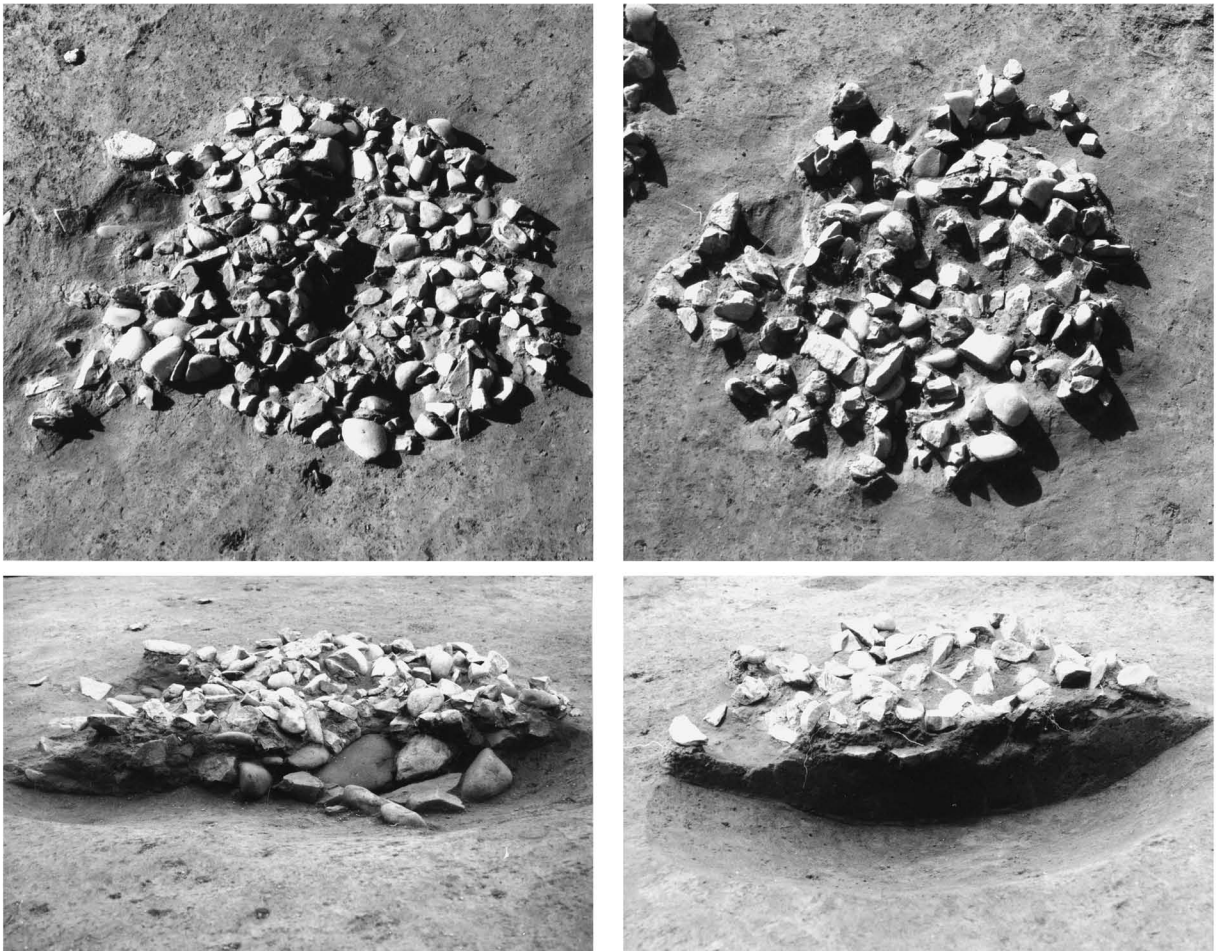
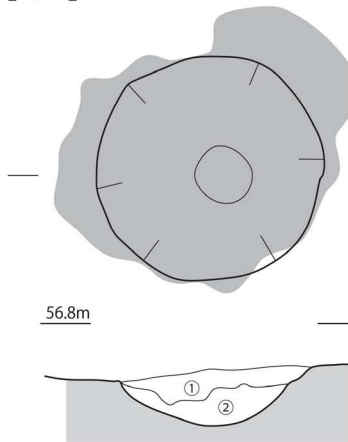
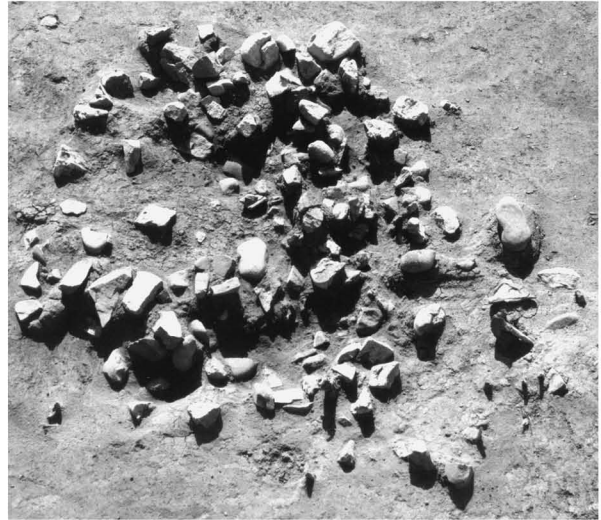


図 29 縄文時代早期集石遺構 19 (S=1/30)

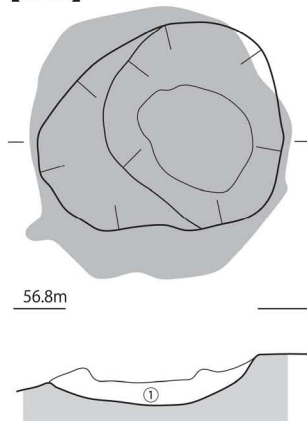
【SI41】



- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性弱 しまり無 礫を含む
- ②混土礫層 黒褐色 10YR2/3 粘性弱 しまり無 礫を4個含む



【SI42】



- ①混土礫層 褐色 7.5YR4/4 粘性弱 しまり無 礫を多く含む。ほとんど赤化。

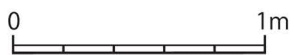


図 30 縄文時代早期集石遺構 20 (S=1/30)

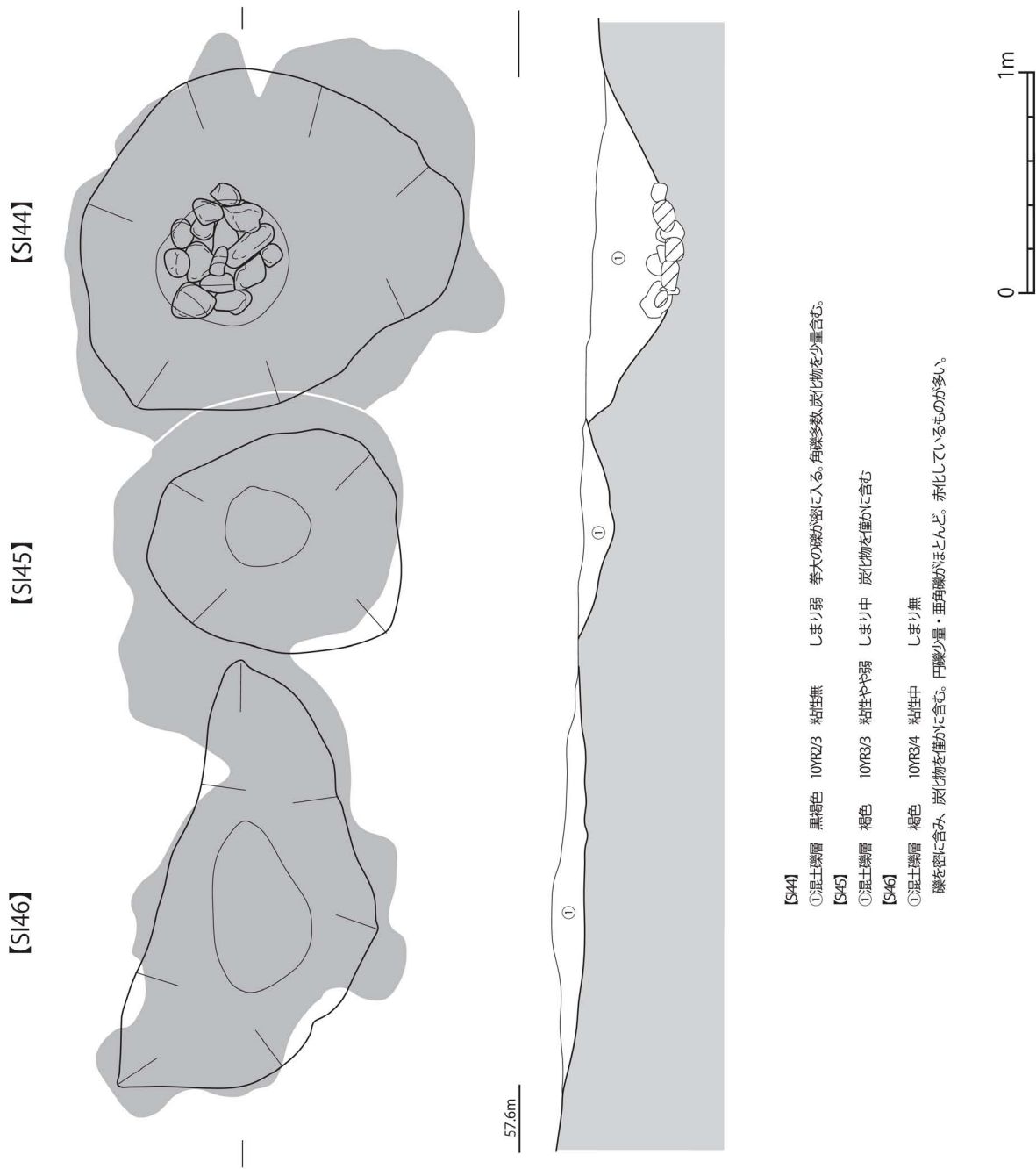


図 31 縄文時代早期集石遺構 21 (S=1/30)

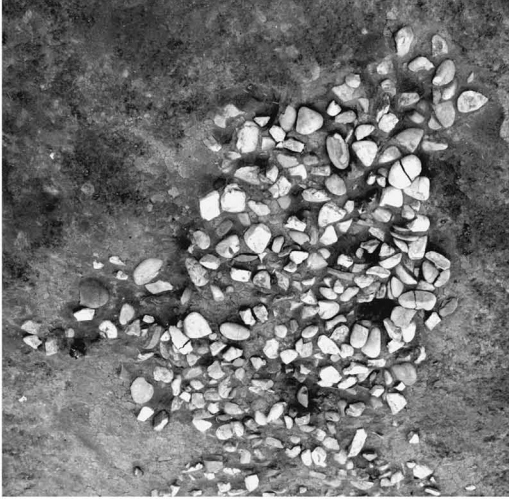
【SI44・SI45・SI46 (図 31)】

SI44・SI45・SI46 は C5d 区周辺に分布する集石遺構の中心的な遺構である。

C5d 区は散礫検出時においても、礫の密度が特に高いことが確認され、散礫に混じって土器(図 51-18) も出土した。この段階で数基の集石遺構が密集して存在することが予想された。SI44 と SI46 は散礫検出時に認定しており、SI45 は礫の範囲が確定で

きなかったため、散礫除去後に認定した。

しかし、散礫除去後、平面における礫の分布状況を観察すると、SI44 と SI45 の境界は、SI45 の輪郭を描いて礫が弧状に分布しているように看取された。このため、検出時に想定した先後関係は、SI45 → SI44・SI46 であったが、断面観察の結果、SI44・SI46 → SI45 であると考えられる。



【SI46】

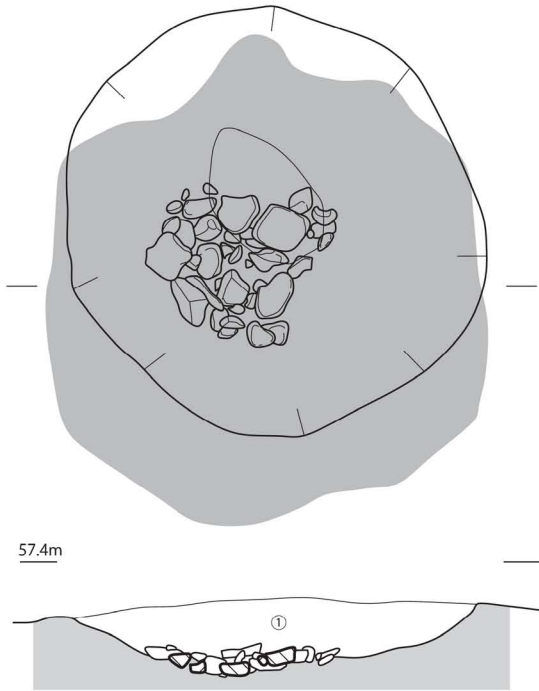


【SI45】



【SI44】

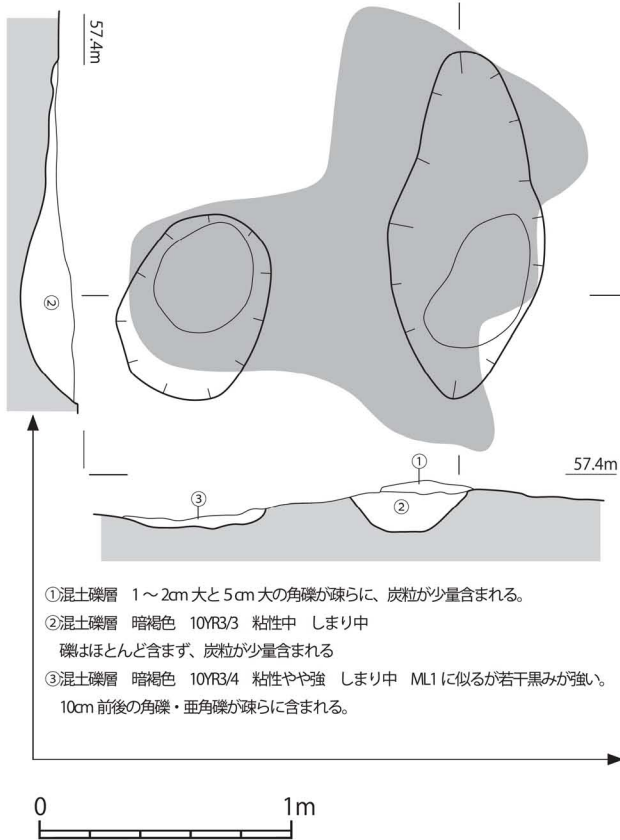
【SI43】



①混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性中 しまり弱
5～10cm大の角礫を密に含む。5cm前後の小ぶりのものが多い。赤化率は約50%。
炭化物を少量含む。



【SI48】

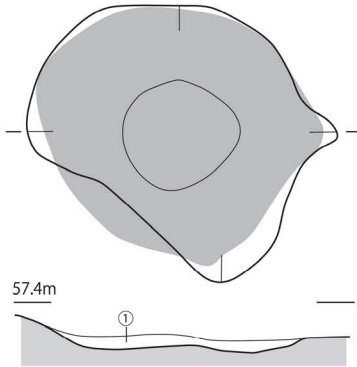


①混土礫層 1～2cm大と5cm大の角礫が疎らに、炭粒が少量含まれる。
②混土礫層 暗褐色 10YR3/3 粘性中 しまり中
礫はほとんど含まず、炭粒が少量含まれる
③混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性やや強 しまり中 ML1に似るが若干黒みが強い。
10cm前後の角礫・亜角礫が疎らに含まれる。



図 32 縄文時代早期集石遺構 22 (S=1/30)

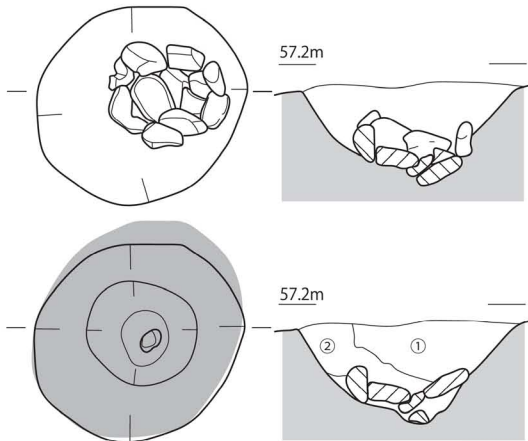
【SI49】



①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性中 しまり弱
10cm以下の角礫・亜角礫を疎らに含む。炭化物を少量含む。



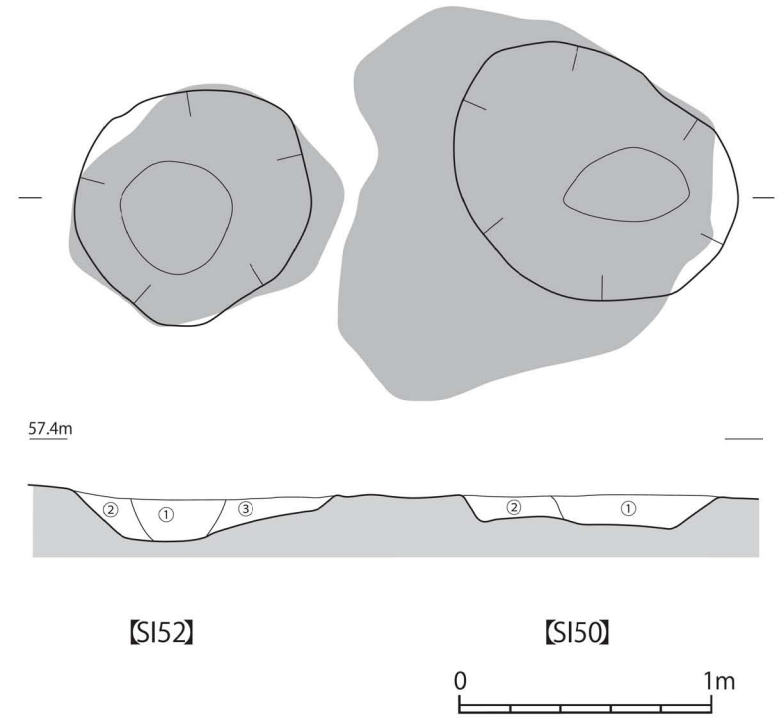
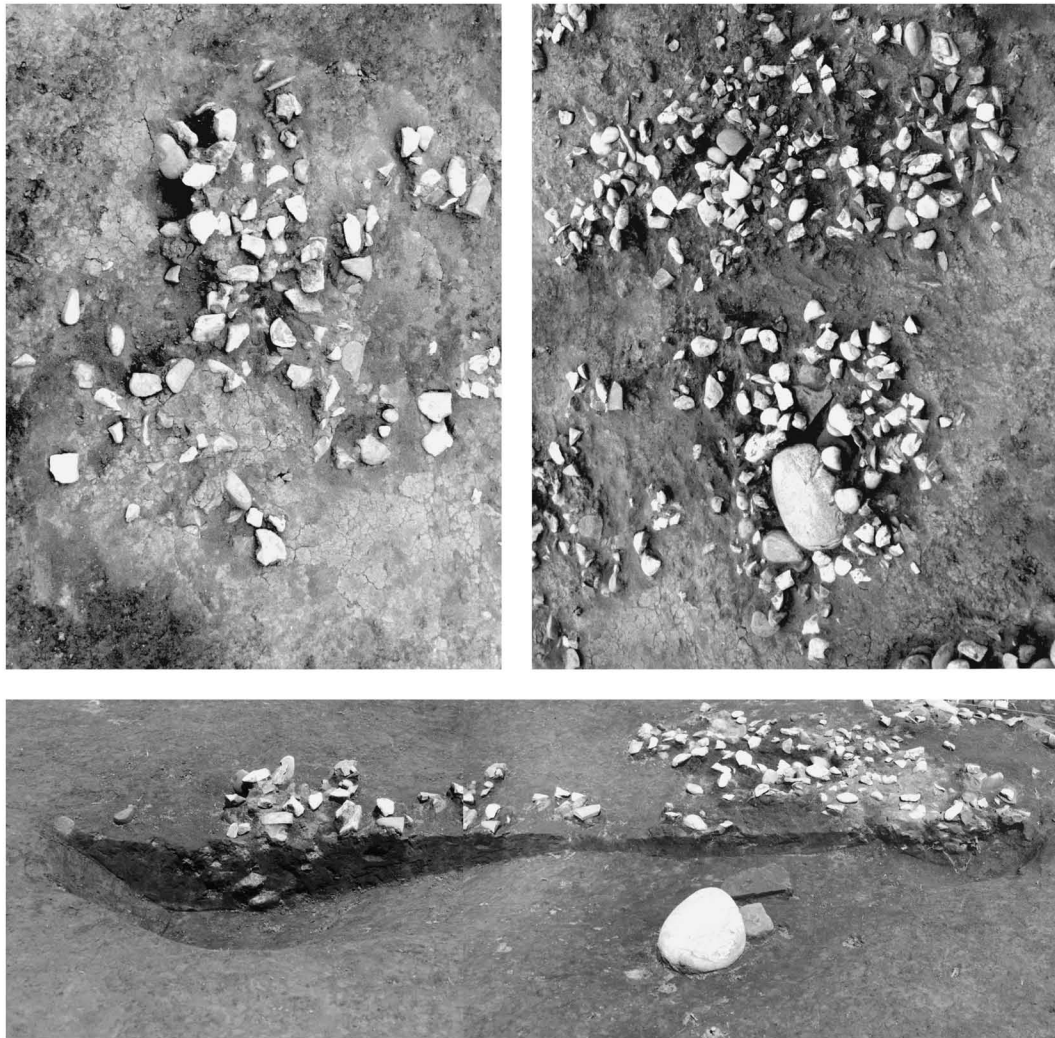
【SI51】



①混土礫層 褐色 7.5YR4/6 粘性弱 しまり無
②混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性弱 しまり無



図 33 縄文時代早期集石遺構 23 (S=1/30)



【S152】

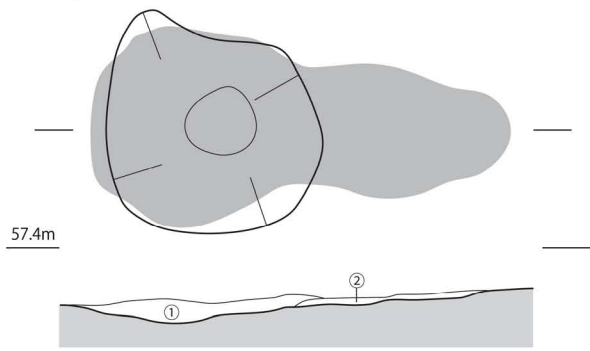
- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性弱 しまり弱 拳大の礫を多数含む
- ②混土礫層 褐色 10YR4/4 粘性弱 しまり弱 拳大以下の礫を数個含む
- ③土層 褐色 10YR4/4 粘性弱 しまり無 礫含まず

【S150】

- ①土層 暗褐色 10YR3/4 粘性弱 しまり弱 礫含まず
- ②混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性弱 しまり弱 ①層よりやや軟。拳大以下の礫を多数含む。

図 34 縄文時代早期集石遺構 24 (S=1/30)

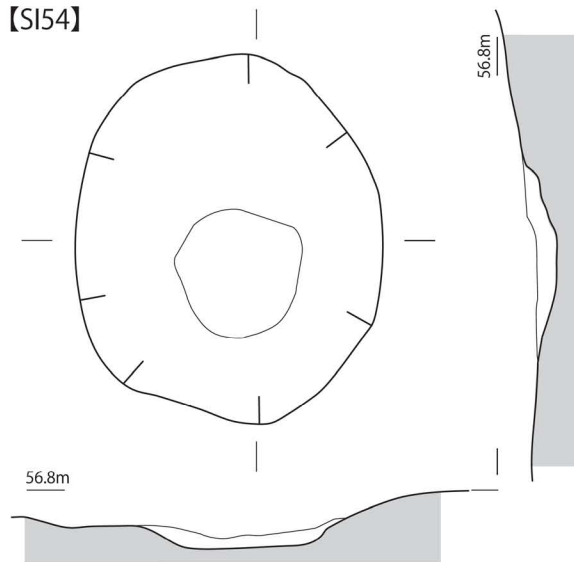
【SI53】



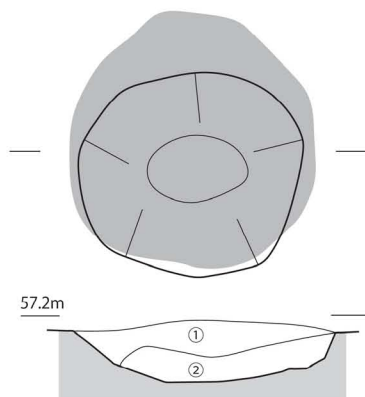
- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性無 しまり弱 拳大以下の礫数点あり
- ②土層 褐色 10YR4/4 粘性無 しまり弱 礫なし



【SI54】



【SI55】

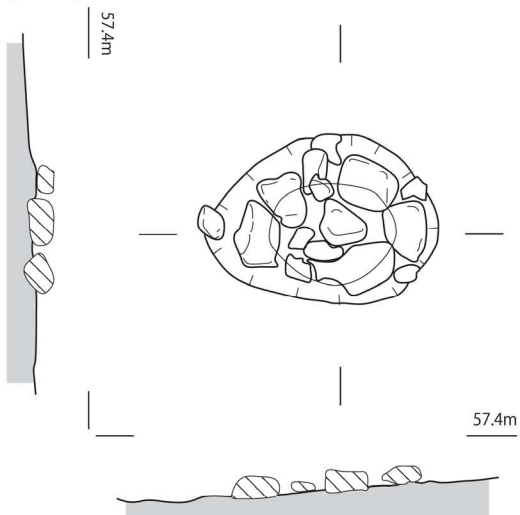


- ①混土礫層 褐色 10YR4/6 粘性無 しまり無 角礫を多く含む
- ②混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性無 しまり無 白色粒を含む

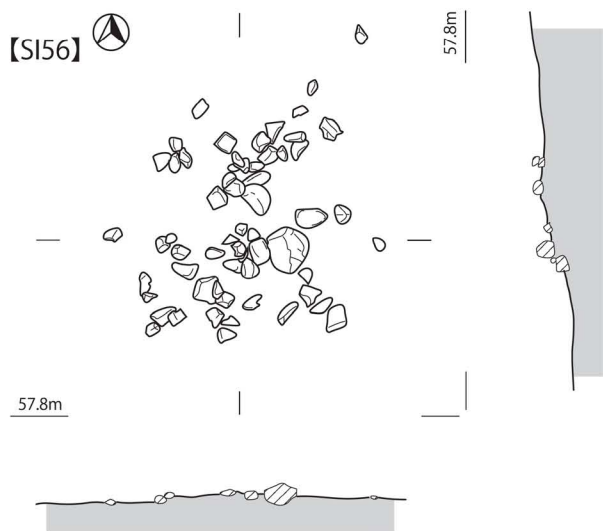


図 35 縄文時代早期集石遺構 25 (S=1/30)

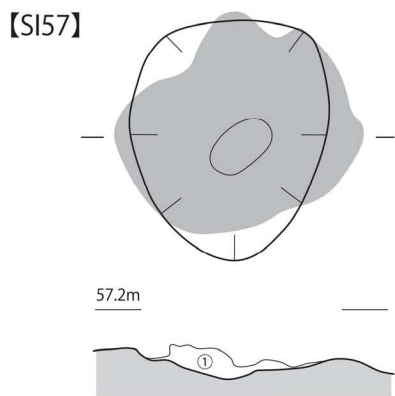
【SI47】



【SI56】



【SI57】

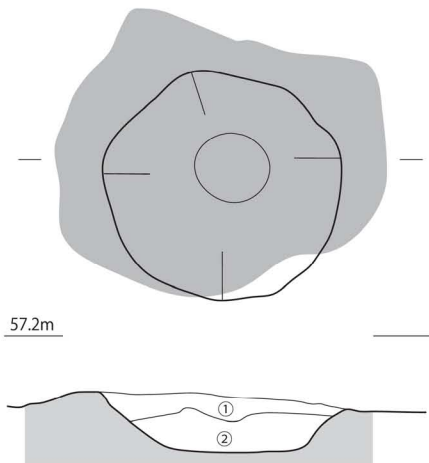


①混土礫層 暗褐色 75YR3/4 粘性弱 しまり弱 拳大の礫を含む

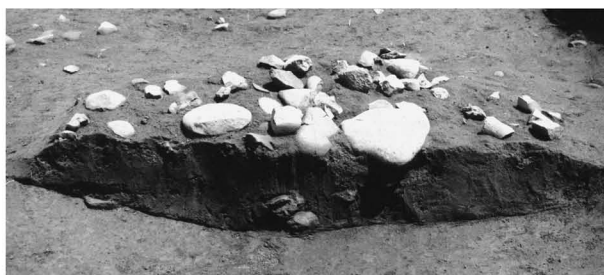
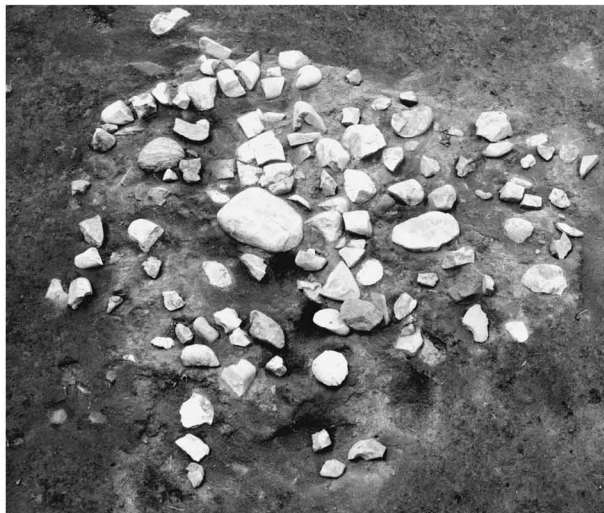


図 36 縄文時代早期集石遺構 26 (S=1/30)

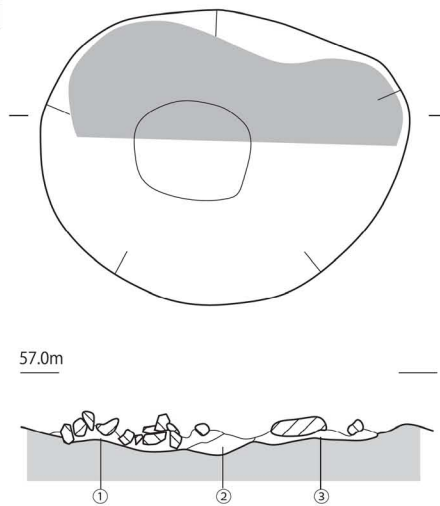
【SI58】



- ①混土礫層 褐色 10YR4/4 粘性弱 しまり弱 礫を含むが土質は軟。
- ②混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性弱 しまり強 拳大以下の礫を含む。



【SI59】



- ①混土礫層 褐色 7.5YR4/4 粘性無 しまり強
φ 4cm 大の礫が密集しており、一部変色している
- ②土層 褐色 7.5YR4/4 粘性無 しまり無 礫なし
- ③混土礫層 褐色 7.5YR4/4 粘性無 しまり無
若干土が軟らかく、φ 5~10cm 大の礫が疎らに含まれる

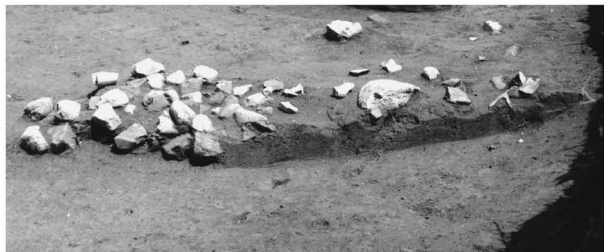
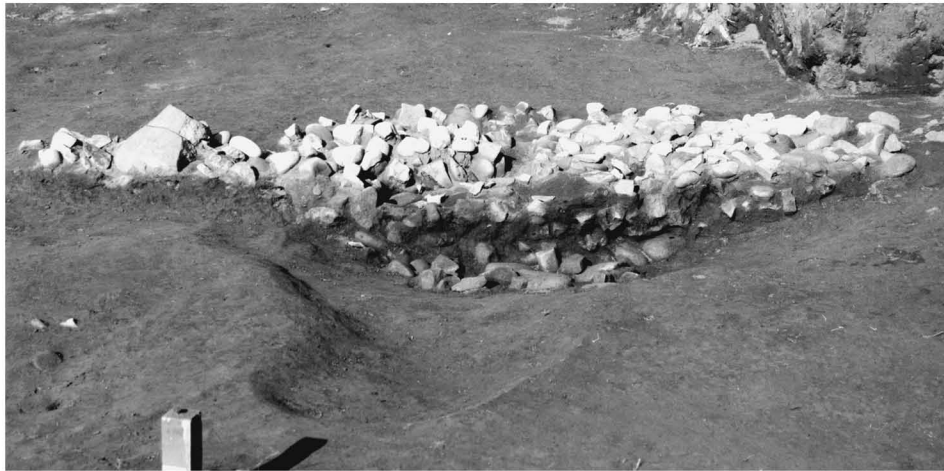
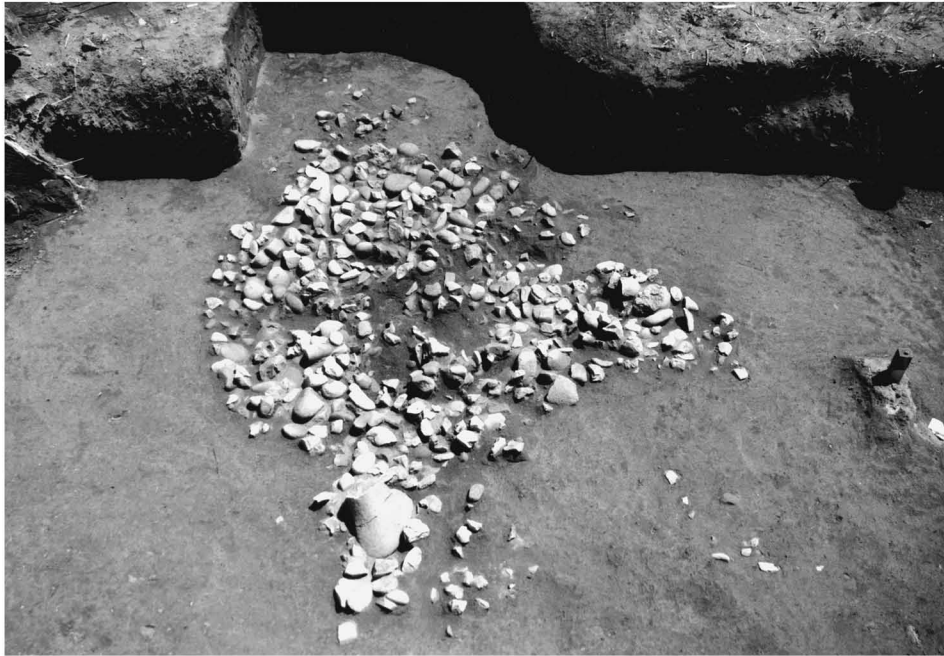
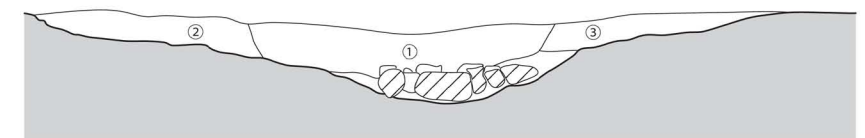
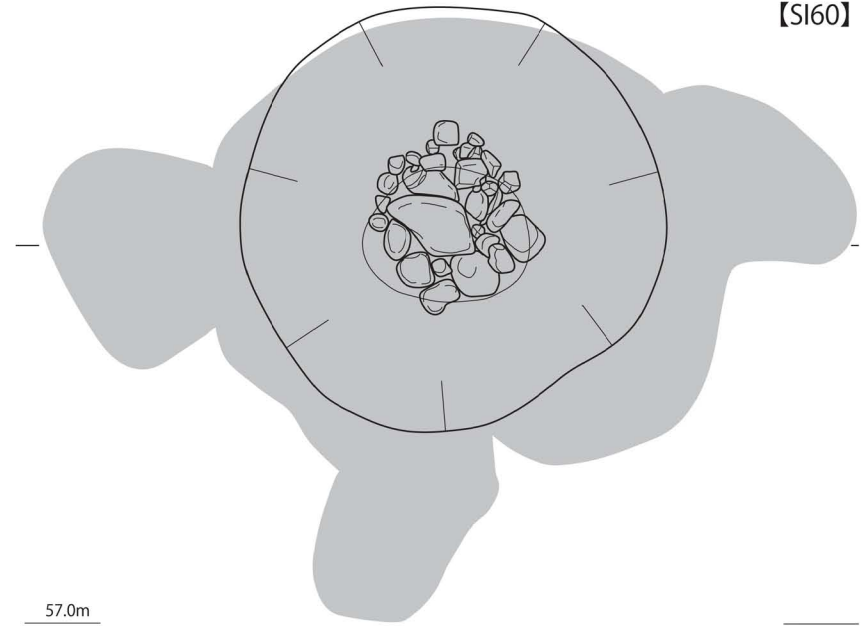


図 37 縄文時代早期集石遺構 27 (S=1/30)



【SI60】



- ①混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性弱 しまり弱 拳大の礫を多量に含む
- ②混土礫層 褐色 10YR4/6 粘性弱 しまり弱
- ③混土礫層 暗褐色 10YR3/4 粘性弱 しまり弱 拳大以下の礫を多量に含む

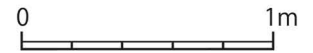
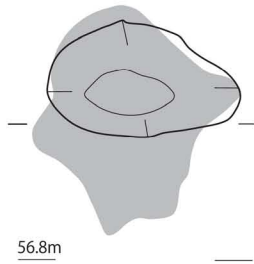


図 38 縄文時代早期集石遺構 28 (S=1/30)

【SI61】



56.8m



①混土礫層 暗褐色 10YR3/2 粘性弱 しまり無 礫密度は低い

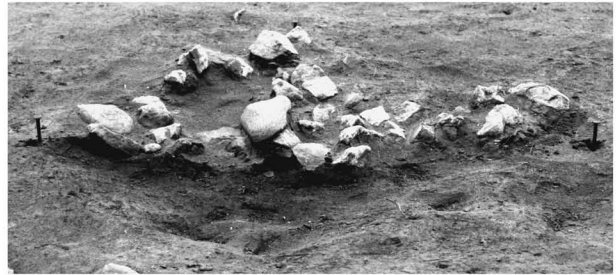
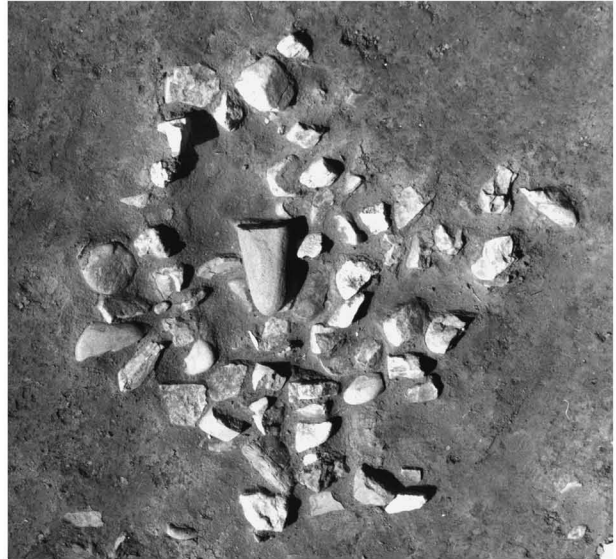
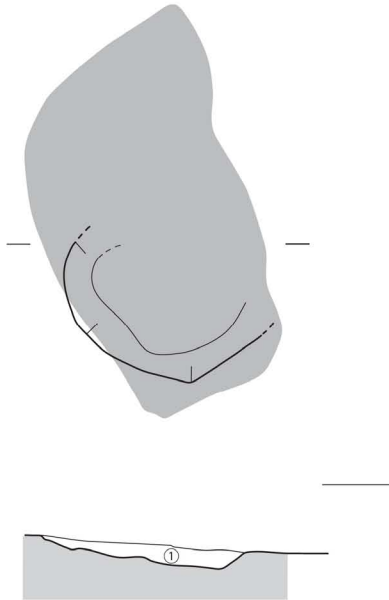


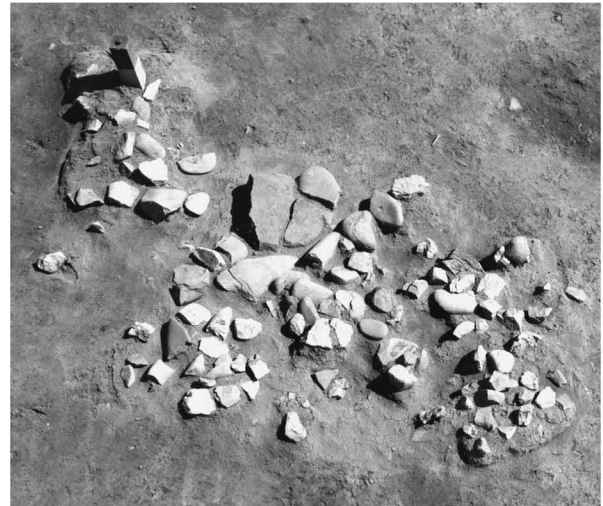
図 39 縄文時代早期集石遺構 29 (S=1/30)

【SI62】

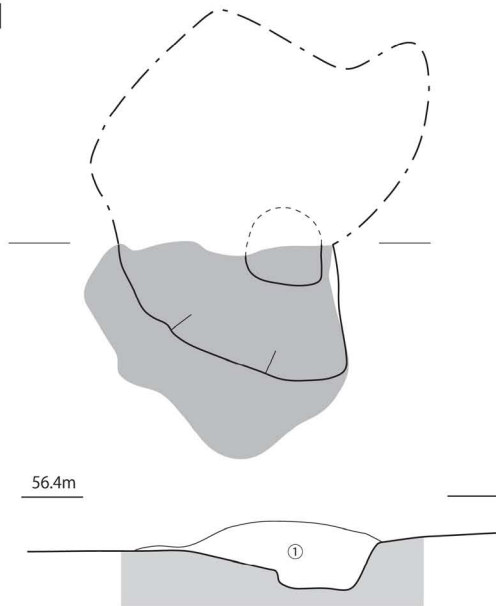


58.8m

①混土礫層 褐色 75YR4/6 粘性弱 しまり無 礫はほとんどが赤化



【SI63】



56.4m

①混土礫層 褐色 10YR4/6 粘性弱 しまり弱 上部に拳大の礫を含む

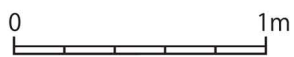
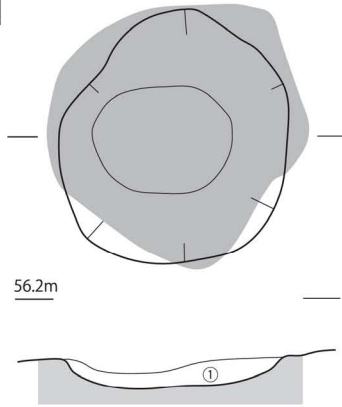


図 40 縄文時代早期集石遺構 30 (S=1/30)

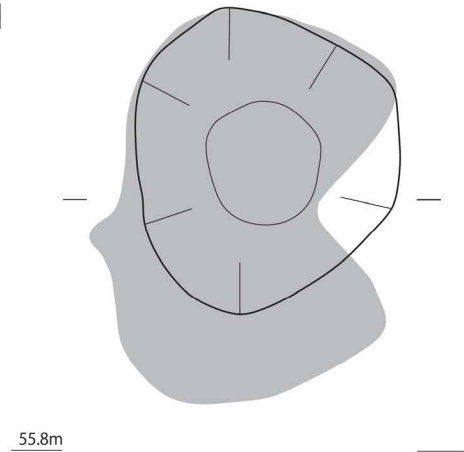
【SI64】



①混土礫層 褐色 10YR4/6 粘性中 しまり無
湿り気あり。拳大の礫を3個、拳大以下の礫を少量含む。



【SI65】



①土層 黄褐色 10YR5/6 粘性中 しまり強 礫含まず
②混土礫層 褐色 10YR4/6 粘性中 しまり強 礫含む



図 41 縄文時代早期集石遺構 31 (S=1/30)

3 炉穴

今次調査では炉穴が7基検出された。SP 1・SP 2はB5c区、SP 3はB5b区とB5d区の境界線付近、SP 4・SP 7はD4c区、SP 5・SP 6はC5a区に位置する。これらは調査区北辺、即ち、尾根中央付近の平坦地もしくは緩斜面に立地する。

【検出】

確認調査では、集石遺構は検出されたが、炉穴は検出されなかった。しかし、炉穴は平坦地と斜面地の両方に構築される例があるため、調査区全面で炉穴の確認をする必要があった。まずGrG以東の斜面地においてトレンチ3本を傾斜に沿って設定し、炉穴の検出作業を行ったが、遺構・遺物とも確認されなかった。次に平坦地は、集石遺構がない場所で遺構精査を行った後、全体を掘り下げて検出作業を行った。また、集石遺構の調査が終了した場所でもトレンチをあけ、炉穴の検出作業を行った。

【調査方法】

炉穴の検出後、長軸に沿って半截し、断面図を作成した。しかし、作業工程や検出する際の掘削深度によっては写真記録のみのものがある。重複する炉穴については、検出面で先後関係を判断し難く、断面観察によって判断した。出土遺物と礫については原位置を保った状態もしくはそれが推定できる状態のものなかったため図化していない。

【SP 1・SP 2 (図 42)】

SP 1とSP 2はB5c区に位置する。重複しており、断面観察の結果、SP 2がSP 1に先行する。両者ともに長軸は東西方向であり、SP 1が若干北に振る。長軸は地山の傾斜に並行する。

SP 1は長軸1.98m、短軸は0.93mを測る。床面は凹みが2箇所あり、西(傾斜の低い方)が浅い。埋土は黒褐色の硬質土で炭粒と礫を若干含むが、明瞭な焼土の堆積はみられなかった。また、埋土中から土器(図50-17)が出土した。

SP 2は長軸3.36m、短軸推定0.8mを測る。SP 1に切られているため、東端と西端が残っていたが、東端付近はSP 1より深く検出面からの深さは約0.6mである。西端は深さ約0.1mで浅い。埋土はSP 1とさほど変わらない。遺物は出土していない。

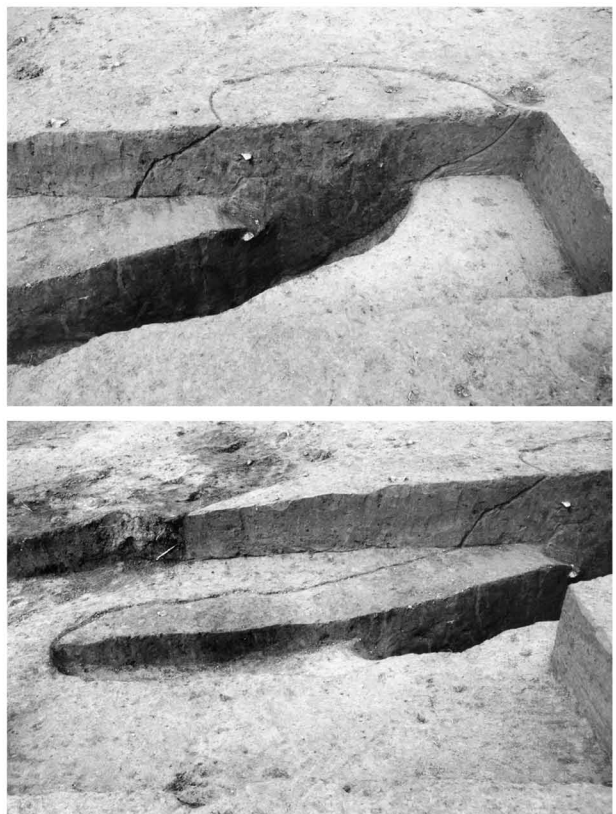
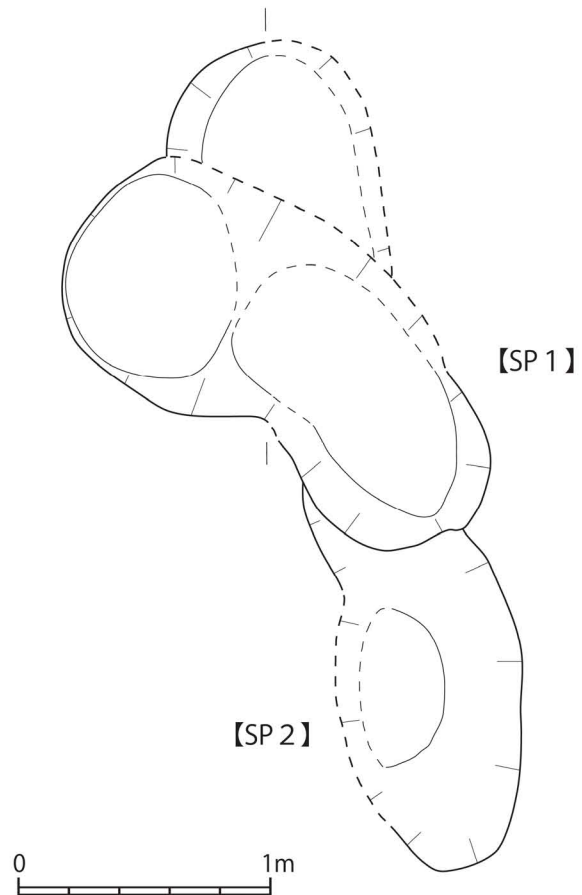


図 42 縄文時代早期炉穴 1 (S=1/30)

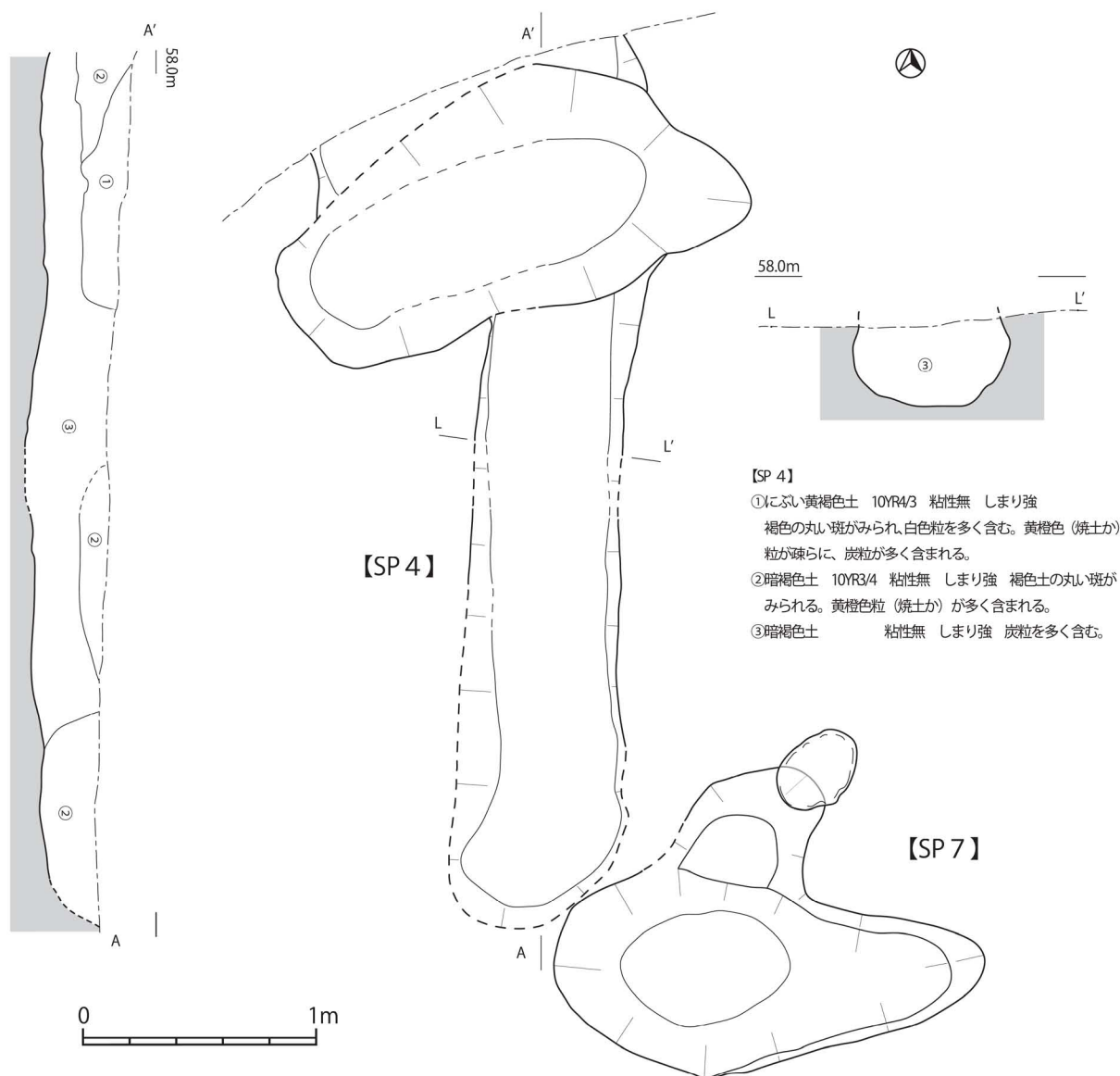


図 43 縄文時代早期炉穴 2 (S=1/30)

【SP 4 (図 43)】

SP 4は D4c 区を中心とした場所に位置する。周辺の集石遺構調査が終了した段階で全体を掘り下げた結果、第V b層中から検出された。長軸はほぼ南北である。SP 4は北側で別の土坑に切られているが、幅を広げつつ調査区外北方へ続くと考えられる。長軸は 3.7m 以上、短軸は約 0.64m である。断面を観察すると壁面は床から広がるように伸び途中からオーバーハングする。埋土に明確な焼土の堆積層はみられない。なお、調査中は SP4 を「SP 4a」とし、SP 4を切る土坑を「SP 4b」と称した。実測、遺物の注記はこの名称を用いている。

【SP 7 (図 43)】

SP 7は SP4 の南に接するように位置する。検出面が低いため、SP 4との先後関係は不明である。長軸は東西方向で、長さ 1.82m、短軸は約 0.8m を測る。平面形は涙滴状であるが、北側にやや浅い張り出しがある。この張り出し部分で扁平な礫が出土した。出土位置は検出面で SP 7の中心に向かって傾斜するように位置していた。この礫は径 40cm × 28cm 厚さ 6cm の砂岩である。礫上面の周縁部は加火または被熱によって赤化しており、中央部分は礫面の色が残る。底面付近には焼土層が堆積しており、埋土中にも赤化した礫が疎らに混じっていた。

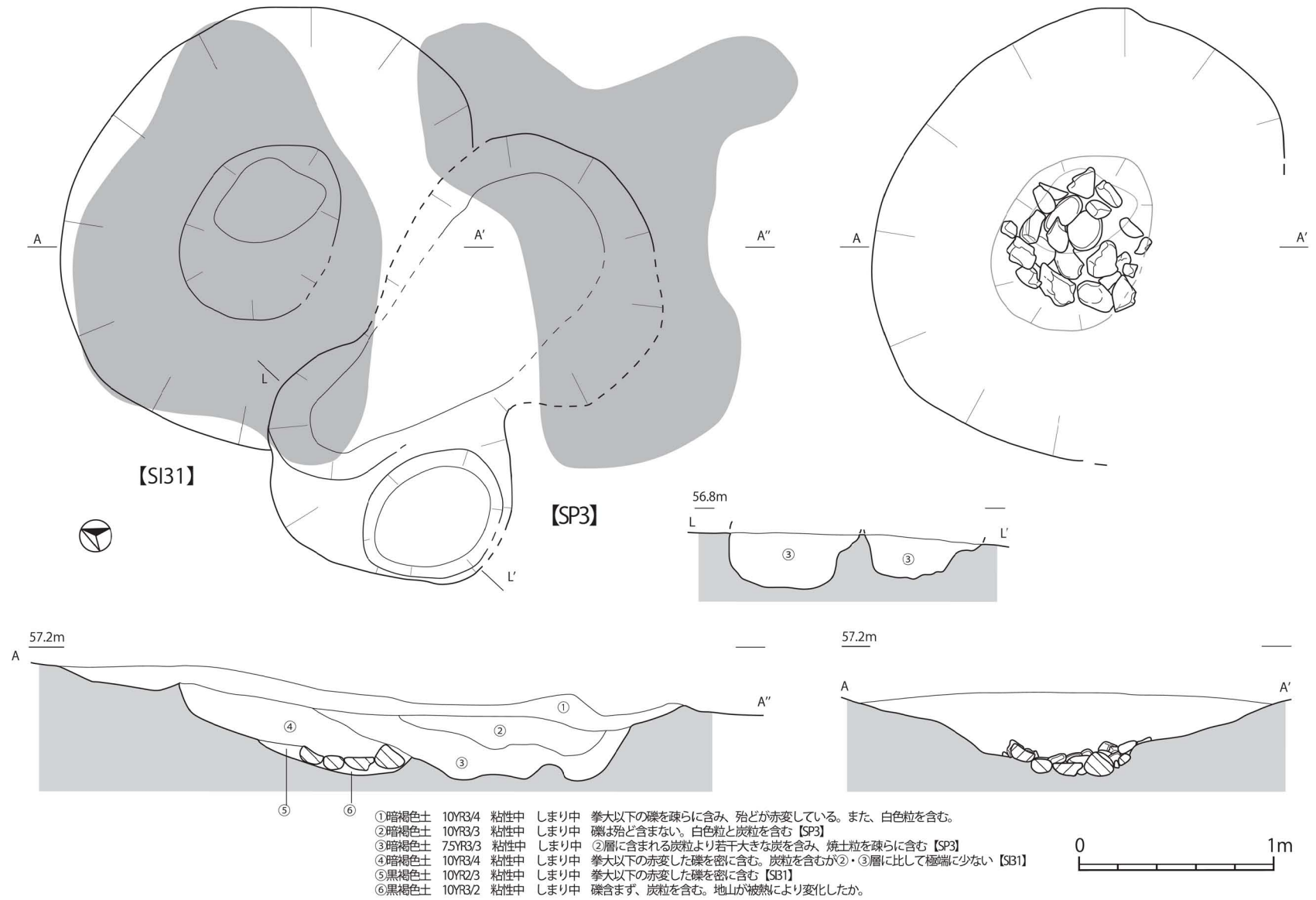
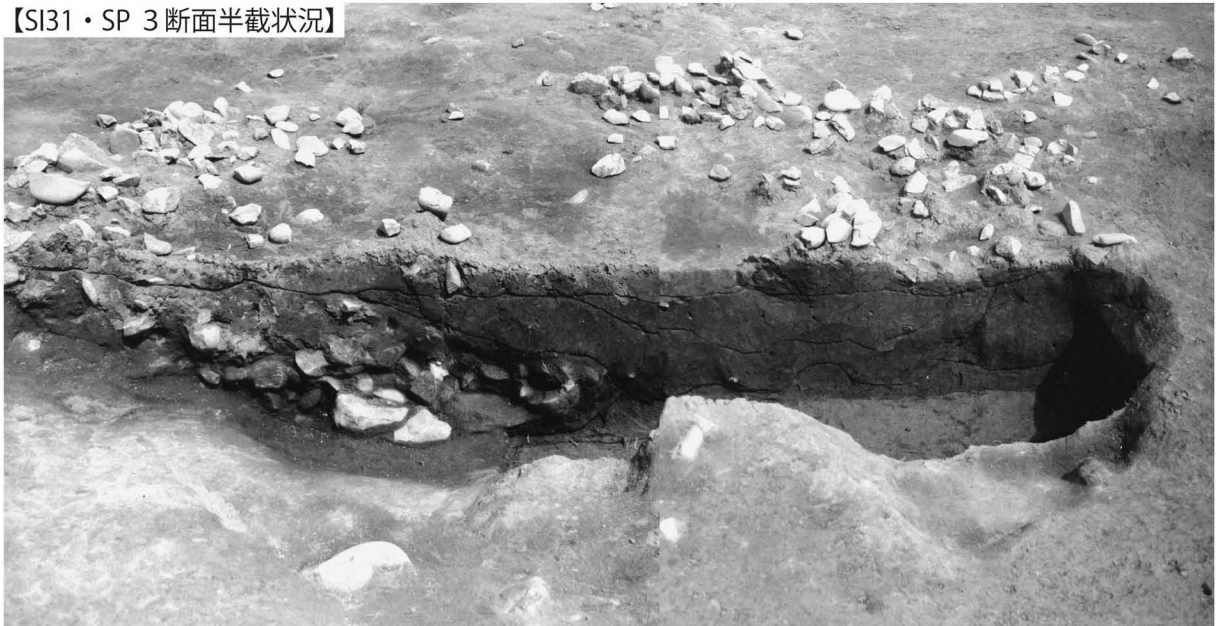


図 44 縄文時代早期炉穴 3 (S=1/30)

【SI31・SP 3 検出状況】



【SI31・SP 3 断面半截状況】



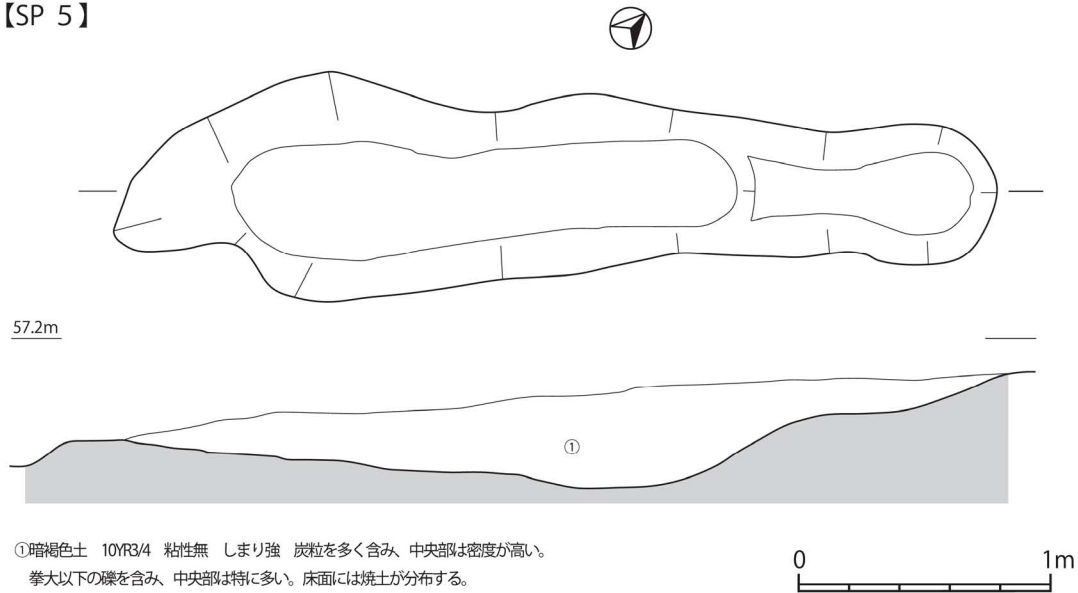
【SI31 (図 44)】

当初、SI31 は礫のまとまりが2箇所認められたため、集石遺構2基が近接して存在していると考えられていた。しかし、両者を結ぶ長軸に沿って半截したところ、集石遺構が別の遺構 (SP3) に切られている状況が判明した。即ち、まずSI31 が存在し、次にSP 3がSI31 を半分破壊しつつ構築されたようである。そして、SP3が埋没する過程の最終段階にSI31由来の礫が土とともに堆積したと考えられる。SI31の配石と検出された礫の間に土が間層として入っていることもその証左といえるであろう。

【SP 3 (図 44)】

SI31の東側を切る形で存在する。長軸は南北方向からやや西に振っている。長軸は2.49 m、短軸は1.38 mを測る。深さは南側が約0.3 m、北側が0.76 mで、北側が深い。北側には窪みが二箇所あり埋土に炭化物と焼土粒が認められた。焼土の層はなかったものの炉穴の可能性が高いとみられる。

【SP 5】



①暗褐色土 10YR3/4 粘性無 しまり強 炭粒を多く含み、中央部は密度が高い。
拳大以下の礫を含み、中央部は特に多い。床面には焼土が分布する。

【SP 6】

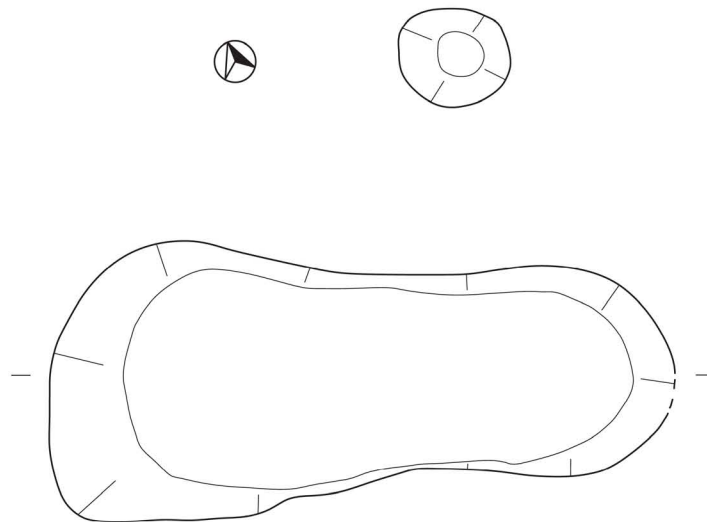


図 45 縄文時代早期炉穴 4 (S=1/30)

【SP5 (図 45)】

SP5 は長軸が南北方向からやや東へ振る。長軸は 3.48 m、短軸は 0.9 m を測る。床面は図の右側が 2 段になっており、左側に向かって徐々に浅くなる。埋土は単層ながら、焼土粒と炭粒を含んでおり、また、床面の最深部は土がやや赤変しており、火を焚いていたと考えられる。なお、SP5 の図上右端は SI26・SI27 と、図上左端は SI31 と若干重複するも、先後関係は不明である。

【SP6 (図 45)】

SP6 は長軸がほぼ東西方向である。長軸は 2.49 m、短軸は 11.1 m を測る。深さは図上右端で 0.4 m、左端で約 0.2m を測る。埋土は単層ながら、焼土粒と炭粒を含んでおり、また、床面の最深部は土がやや赤変しており、火を焚いていたと考えられる。重複する遺構はない。SP6 北側に浅い土坑があったが、SP6 との関係は不明である。

【SC 3】

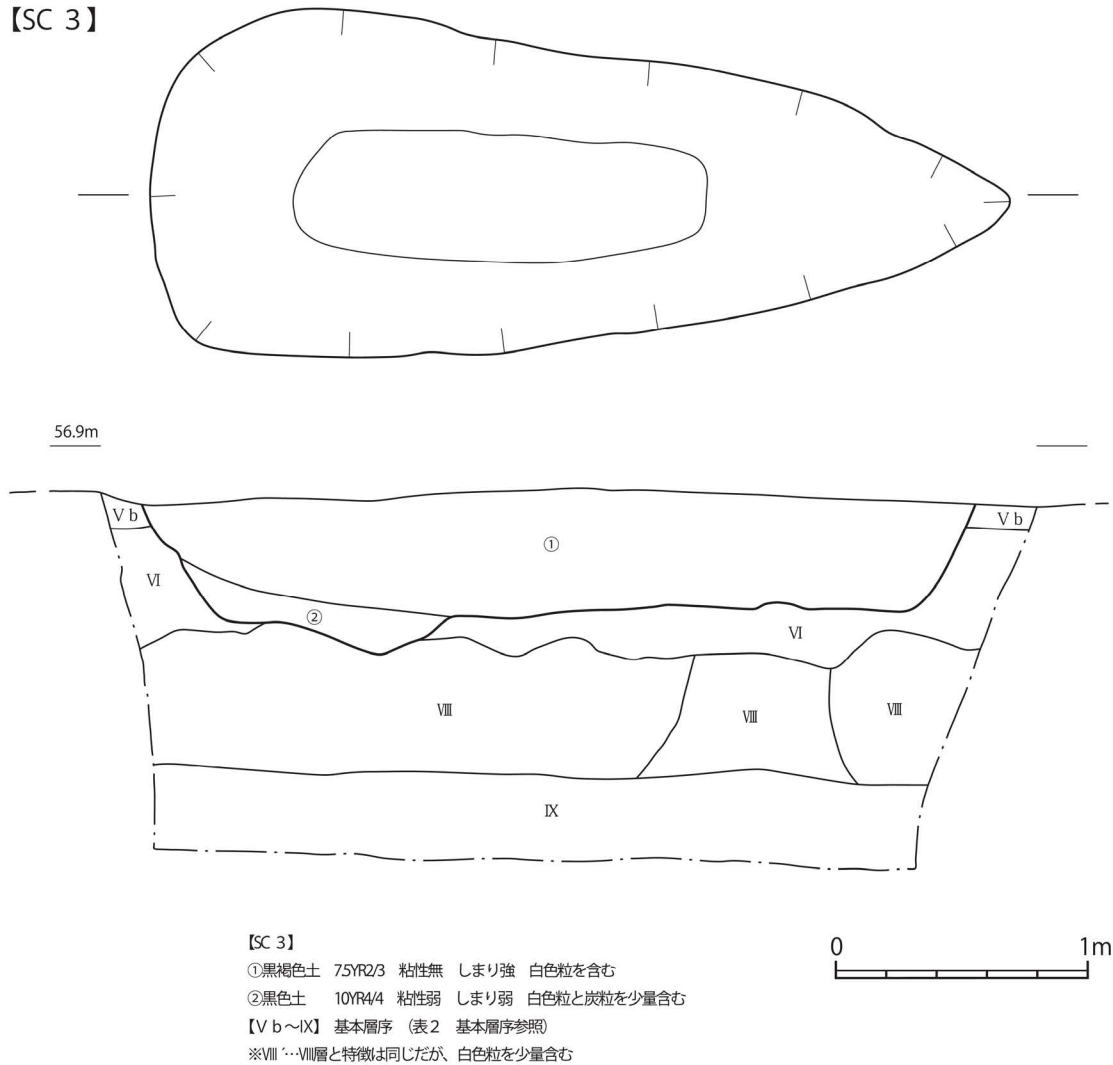


図 46 縄文時代早期土坑 1 (S=1/30)

4 土坑

【SC 3 (図 46)】

SC 3はC6d区に位置する。SI58・SI59の調査後に全体を掘り下げたところ、V b層中から検出された。層位的にはSI58・SI59の下に位置するか先後関係は不明である。また、埋土中から炭粒や焼土粒が顕著に認められなかったので、炉穴の可能性は低い。

SC3を大きく断ち割ったところ、VII、VIII層が検出された。VII・VIII層は調査区内に普遍的に見られる層ではないが、調査区南側の斜面付近でのみ確認される。VIII層下部には軽石状の粒が多くみられたため一次堆積層であると認められる。

【SC 1・2 (図 47)】

SC 1とSC 2はGrEとGr. 4の交点付近に位置する不定形の土坑である。両者ともに埋土の質は似ているが、若干色調が異なる。埋土中に少量の炭粒を含むが焼土粒は認められない。時期を示す遺物が出土していないため、時期判定は難しいが、IV層下部からV a層（散礫）上面付近で検出されており、集石遺構と何らかの関係があると考えられる。